

日本文學士寺内淳一郎君譯

日本文學士寺内淳一郎君譯

奢侈之國論

發行所

國光社

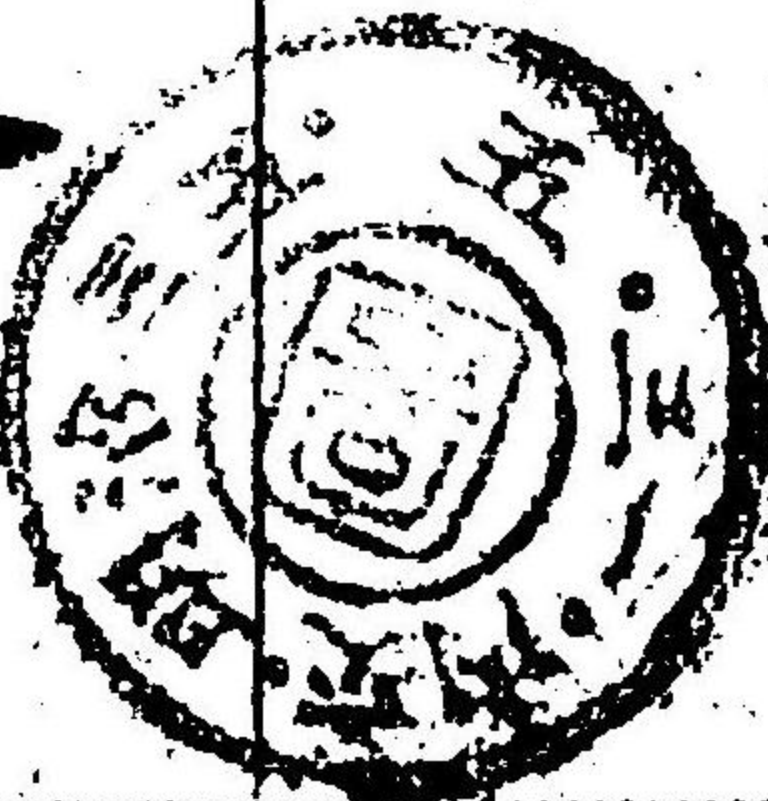
白耳義大學教授ラブレール氏原著

日本支學士内淳二郎君譯

大者侈
亡國論

發行所

國光社



序

昔者ル井十四世、豪奢の極時に於て揚言して曰く。「帝王が莫大なる消費をなすは是れ人民に慈善をなすなり」と。何ぞ圖らん、其樞肉未だ冷いならざるに、國內に汎濫せる澎湃洶湧の大洪水は、歐洲の天地を搖蕩震撼し、併せて彼れの可憐なる兒孫を無殘にも、斷頭臺上の露と消えしめぬ。あわれル井の慈善も殘忍酷薄ならずや。

二
廿世紀の今日に於ては最早、ル井の如き極端なる妄言囂語を發するものなかるべく、之に傾聽賛同するもの亦絶えてあることなかるべし。特に奢侈を以て無上の惡徳なりとする觀念の深く腦裡に印刻せられたる東洋人に至りては、是等の奇言放論に激揚煽動せらるゝの恐なきを以て、敢て奢侈を辨難攻撃するの必要なきが如しと雖。十八世紀に崛起せる佛國哲學者の餘瀝

に薰染して奢侈の必要を演述する論者漸く胚胎し、假令奢侈の絶對的必要を是認せざるにもせよ、或種類の奢侈は文明進歩を促進する原動力たるを唱道するものあり。或は奢侈を絶對に否定するも、其害毒餘弊、古代哲學者の垂訓せる如く熾烈ならざるを主張するものあり。衷心奢侈の不正を了知して其惡風に感化せらるるあり。奢侈の利益を公言して自ら墮落の深淵

四
に沈淪するものありて、華奢輕佻の風社會に瀰
蔓し、昔日孔孟が畢生の心血を枯渴して天下に
遊説せし名教も、基督が熱涙を揮ふて人民に布
教せし訓戒も、ソクラテースの金言も、アリス
トテレスの玉條も、徒らに馬耳の東風に任する
に至りては、世教の壞敗亦岌々乎として危きも
のあり。予輩が春眠曉を覺えざるの誹謗を冒し
て、事新らしく、絶對的奢侈否認論を紹介する所

以のもの些か社會の惰眠を警戒して、風教維
持の一助となさんとするの微意なくんばあら
ず。

且夫れ奢侈は如何なる心理作用によりて發生
するか。如何なる外界の事情によりて助長せら
るか。奢侈は政治宗教、教育美術に如何なる
影響を與ふるものなるか、國民經濟、財産制度
と如何なる關係を有するか。——凡て是等の問

題は古代聖賢の未だ論究せざる所にして、學者の宜しく闡明すべき大問題たり。唯其範圍廣濶にして、心理、倫理、法律、經濟の諸學科に涉獵し政治歴史の事實に通曉するにあらざるよりは、充分なる解答を與ふる能はざるを以て、學者多くは深淵の遊魚に垂涎して網罟を結ぶ能ざりき。彼のマンテヴイル、ヴォルテール、ヒューム、デユモン、ルーソー、フネロン等が能く奢侈の議

論を上下し、ロツセン、マンゴールド等の經濟學者が屢々奢侈に關する意見を吐露せるにも拘らず、散漫蕪雜、一部の統系、秩序ある奢侈論を案出する能はざりしは蓋し是れが爲にして、完全なる奢侈の定義さへも擧ぐる能はざりしは又是れが爲也。獨り佛國の碩學ボードリラー氏率先して有名なる奢侈の歴史を大成し、豐富なる學殖と犀利なる識見とを以て縦横論議、奢

八
侈論の爲に關門を開放せるは吾人の深く景仰する所たり。是れ奢侈問題を講究するもの、必讀すべき良書にして、我が最も社會に推薦せんとする所なるも、如何せん其書冊浩漭に過ぎ、之が翻譯紹介するは到底微力短才の及ぶ所にあらず。乃ち伯耳義リージ大學教授ラヴレー氏の奢侈論を譯述して、絶對的奢侈否認説を社會に推舉するに至りぬ。ラヴレーの説往々我輩の

首肯し難き所あるも、大体に於て正當にして正鵠を失することなく、又ボードリラー氏の説を引用評隲して往々痛快を極むるものあり。譯文の艱澁或は原文の價值を失墜して、庸工玉を毀傷するの罪なき能はざるも、原文の意を祖述するに於ては充分なりと信ず。若夫れ誤譯脫字の如きに至りては後日讀者の注意を待て改刪訂正する所あらんとす。讀者幸に指摘教示の勞を

吝む勿れ。本書の翻譯に際し、法科大學々生、小
川市太郎君の助力を籍ること多し、附記して以
て其勞を謝すと爾云ふ。

譯者識す

奢侈亡國論目次

第一章	緒言	一
第二章	奢侈とは何ぞや	三
第三章	奢侈の動念	八
第四章	奢侈は不正なり	三〇
第五章	奢侈は道德進歩の原因にあらず	四八
第六章	奢侈と器械的進歩	六〇
第七章	奢侈問題の三方面	七三
第八章	奢侈と理想的生活	七五

第九章	奢侈と國民の繁榮……………	九四
第十章	奢侈と正義……………	一二〇
第十一章	國家の奢侈……………	一二八
第十二章	奢侈と政體……………	一三三

附 録

第一章	經濟學と社會學の分派との關係……………	一四七
第二章	經濟學と道德との關係……………	一六五
第三章	經濟學と法律との關係……………	一七九
第四章	經濟學と歴史との關係……………	二二二

奢侈亡國論

第一章

緒

論

白耳義リッ
大學教授 ラヴレー原著
日本文學士 寺内淳二郎譯

十八世紀に於ては、奢侈に關する議論は頗る激烈にして、又長日月に亘れり。今日に於て予は餘り是等の議論をなす人あるを聞かざるも、茲に之を論極するの必要あるを認む。奢侈は果して人生に必用なるものなる乎。是れ實に予の決定せんとする問題也。予が嘗て聞知せる一場の談柄は能く這般の問題を包括するものと云ふべし。之に

よるに。十八世紀に於ける一經濟學者と、其財政家と奢侈論に關し全く意見を異にし、財政家が奢侈は國家を保持すと揚言するや。經濟學者は猶刑吏の繩が絞罪人を保持するが如くに翻弄せり。予は全く經濟學者の説に左袒す。古代の哲學者並に教會の師父等は激烈なる言語を放ちて奢侈を警戒せしが、是れ實に正當にして疑を容るべからざるなり。奢侈は個人に有害なると共に社會の滅亡を誘導するものたり。古代の基督教は慈善と人道の名に於て之を譴責し、經濟學は實利に背くとして之を非難し、正義の觀念は公平に反するとして之を排斥せり。

第二章 奢侈とは何ぞや

先づ吾人をして所謂、奢侈なる言葉は何を意味するかを説明せしめよ。佛國經濟學の碩儒ボードリラー氏は其名著、「奢侈の歴史」(Histoire de Luxe)に於て別に奢侈の定義を與ふるの勞を取らざりき。彼は各人既に奢侈を知悉するものと仮定せり。是れ固より當然のことなるべきも、更に詳細に奢侈の何たるを論究する亦無用の業にあらざるべし。

我が信する所によれば。奢侈とは人間第一の必要を超過

せる凡ての物と解釋す。購買するに高價の費用を要し、生産するに多分の労働を要するが故に社會少數の人のみ之を享有し得るものと解釋す。奢侈の限界は其所有者に何等の正當なる満足を與ふることなくして、數十百日の勞力による生産を空しく洩盡するにあり。舞蹈會に於ける妃嬪等は一萬フランクを値し、五萬時間の慘憺たる労働になれる縁飾を一瞬跳躍の際に破綻して顧慮する所なし、如何ある利益を社會は之に因りて取得したるか。ド、ケラー・トリ氏は奢侈を定義して、「奢侈とは幻夢的、空想的の必用を創立し、實際の必用を超過し、實際の目的

より品物を分岐し、社會に浪費の風習を鼓吹し、五官を通じて利己の情を充滿せしむるものなり。自個獨り所有して他人の共有し能はざる幸福の繪像を社會に矜誇するもの也」と云へり。奢侈の定義中、吾人が認めて適當なりとなすものは一として奢侈を非難するの意味を包含せざるなし。

彼の經濟學者ロツセルが其經濟書に於て、奢侈とは全く關係的の語なりと論せし如く。一時代に於て奢侈物と思惟せらるゝものも、巨額の費用を投せずして容易に獲得せらるゝ他の時代には奢侈品にあらざること明かり。

各國民、並に各時代の人民は通常使用せざる物品を目して贅澤物となす。英國の統計學者ホリンセツトは其統計年鑑に於て、當時（西歷一千五百七十七年）英國の人民が屋根の隙間より煤煙を洩過せしむる代りに煙突を使用し、古來より傳承したる、木製皿、壺、を廢めて、土器、瓦器を輸入せるを見て、奢侈なりと怒號せり。同時代の學者、スランニの如きも「田舎の費用」ある著書に於て、樅樹が楊樹に代用せられたるを憤慨して曰く。「古人は樅樹の如く堅牢なりし故に楊樹の家に住し、今人は楊樹の如く柔弱なるが爲に樅樹の家に棲む」と。中世にありて

は麻布は甚だ珍稀にして皇女等が之を須ゐて、シャツを縫箔し花婿に贈物とし、花婿は就床の前之を脱して其汚染を避けし程のものなりき。然るに今日にては麻布を纏ふ如きは人間零落の極度と見做さるゝにあらずや。綿花と金巾とが印度より始めて輸入せられし頃は富家の淑女のみ之を着け得たりしが、今日にては職工の妻孥も猶之を輕侮しつゝあり。器械の進歩は漸次貴重の物品を多數人民到達の範圍内に持來すを得べし。然れども、高價にして且つ贅澤なるものは奢侈なりとの定義は依然として眞理たるを失はず。

第三章 奢侈の動念

ポードリラー氏は前既に引用せる「奢侈の歴史」に於て、頗る巧妙に又精密に奢侈の動念を分折せり。彼は凡て奢侈には自然にして又一般たるべき動念を分ちて虚飾心、欲望、修飾の性質の三となせり。

虚誇心とは人をして、自個を他人より卓越せり、優偉なりと思惟せしむる希望なり。富と権力とは公衆の渴仰を受くべき要件なるを以て、人が富み且つ権力ありと思惟せらるゝときに幸福を感ず。例へば茲に貴重なる眞珠の

頸環ありとせよ。婦人は四千ポンドの費用を出して之を購求するを辭せざるべし。是れ單に娟美なる物品を所持せんとする爲なるか。若しくは之によりて自身の容貌を美的ならしめんが爲なる乎。否決して然らず。人工にて製作したる眞珠は却て天然のものに比して多くの光輝と、多くの整頓を有するにあらずや。唯巨額の金錢を價せる頸環は其所有者の富の記號にして又表證なるを以て、之を望見するものは彼の婦人を富めりとして垂涎嫉妬し、所有者の虚誇心は之によりて満足するなり。人は毎に満足を要求す。換言すれば常に不平を啣ちつゝあり。是れ

一般人の意思にして又有勢なる意思なり。虚誇心と、之より生ずる美服を愛する念慮は、衣服を着する前に文身する野蠻人中に最も顯著にして、社會組織を成せる文明人に於て始めて醇化せらるゝを見る。且つ教育の高尙なる程度、並に理會力の發達は此等の虚誇心を滅殺し得べし。往昔は男子も婦人の如く燦爛たる織物、丸紐、匾條、寶玉を身に纏ひ、今日に於ても支那並に其他の野蠻人の中には往々此遺風を見るを得べし。然れども現今の文明國は十九世紀の初に於て概ね英國より、クエーカー宗の質素なる黒衣を採用せしを以て、男子にし

て例合ボタンとしてなりとも金剛石の粧飾を着くる如きことあらば、世の士君子は惡趣味として之と齒せざるべし。質素と清楚とは今日に於て男子の雅致に缺くべからざる必要々素となりぬ。

反之、婦人は恰も彼の太平洋諸島の人民、若しくは前世紀の蠻人の如くに、耳朶を貫きて寶石を垂れ、頸の週圍に念珠、若しくは金屬の小片を懸けて得意の色あり。實に彼等は意匠を凝らし、財貨を費やして年々歳々其裝服を不便にするに汲々たるものゝ如し。如何にして、吾人は此弱點、此野蠻の遺風を匡正すべき乎。ジヨン、スチユ

アード、ミル論じて曰く「婦人をして男子の如く社會の事物に鞅掌煩勞せしめよ、彼等は遂に羽毛、彩章の美に其魂を盪かすの愚をなさるに至らん」と。ミルの此言は空想にわらずして至言なり。クエーカー宗は既に之を成功せり。正義の觀念が理解力の開發せる今日に於て、豈此弱點を救治し能はざるの理あらんや。

バッキンガムが佛國の宮殿に於て其衣服に纏へる無數の寶石を散亂して、皇后の侍女に拾聚せしめし以來日未だ遠しとせず。然れども男子の服装は絹布と粧飾せる小縁より變じて質素なる黒衣となれり。何故に同一なる變化

が婦人の衣服に及ばされざるや。希臘羅馬時代には婦人が麻布の長下衣と羊毛の外衣を以て満足したりしにあらずや。要するに奢侈は虚誇心に原因するを以て、吾人の取るべき急務は輿論を一轉するにあり。若し公衆の意見にして、奢侈は野蠻なり、不健全なり、不道德なり、不正なりと認識するに至らば、今日他人に街誇せんが爲に盛粧美服せる婦人等は、廉價にして優雅なる服装を求め、清楚却て人を動かすものあらん。

傳道師にして又雄辯家たるボッセーが婦人の虚飾を罵倒せるの言、最も痛快を極む。曰く「婦人の艶麗なる外觀、

華奢ある装束に就きて一瞥せよ。彼等は之を以て世界に打勝ち、人間の形態を取れる女神として尊崇せられんとしつゝあり。彼等は實に彼等自身の偶像なり、……世人は好んで其娘子を粉飾す。彼等は自家の娘子をして虚飾の見世物となし、公衆貪慾の目的物となし、如斯にして彼等の虚誇心と、他人浮華の情を育成せんとしつゝあり」と。而して最後に絶叫して曰く。「此貪慾なる、此浮誇なる婦人等が黄金寶玉、其他巨多の粧飾を擔ふて自身の價值を高めんとしつゝある間に、此等の粧飾を供給せんが爲に國民は自家を消滅し、美術は其光輝を損蝕し、産

業の範圍は衰頽せんとしつゝあるにあらずや」と。激越の語亦能く現時婦人の真相を指摘して餘蘊あしと謂ふ可し矣。

前述せし如く是等の奢侈は外觀を重んずるの念慮に根蒂するを以て、教育の力能く是等の痴愚、稚氣を洗滌するに至らば、自ら消滅に歸すべきも第二の動念即ち人間の慾望に發生する奢侈に至りては之を排除する頗る困難なるを覺ゆ。

虚誇心は時として人間の嗜欲を精良にすることあるも常に善良ある目的に役立つ能はずして貪慾の情を増長する

泉源たり。今日吾人の饗應は昔日三侯の食卓も殆んど三
 合を避くる程、美味佳肴を以て充塞せらるゝにあらざるや。
 飽食の爲に喪神したる賓客の上顎は食へども酒池肉林の
 味を辨別する能はず、其極遂に嘔吐昏醉の醜體を演じつ
 つあり。之を昔日、親戚故舊相會し、其手製の酒を醸み、
 自ら釣れる鮮魚を撃ちて會飲するに比して其樂果して如
 何ぞや。ブリラー、サビア古代會食の狀況を描寫して曰く。
 「彼等は歳久しく貯へたる葡萄酒に舌鼓を鳴らし、注意
 して調理せられたる鮮魚に陶然たりき。賓客は貪楚飽く
 なき情を以て飲食せず、羞惡の念を以て庖丁の技能を評價

せり。故に食後には歡語洋々として湧き、友情亦掬すべ
 きものありき」と。此等の樂事をして今日皆無たるに至
 らしめしは何なるか。奢侈と貪慾に外ならざる也。
 人間は一個の胃を有するに過ぎず。而も唯小なる一個の
 胃のみ。人間正當の欲望は多くの費用を要することなく
 して満足し得べし。唯高貴を貪り、珍奇を競ふものは、
 所謂外觀を衒はんとするのみ、貪婪飽滿の獸欲を満足せ
 んとするのみ。此外觀を衒ふの情、一端其極に達するや、
 恰も彼のクレオパトラが黄金液に浸したる眞珠を飲み、
 ヘリオグラフィが柴鶴鴿の舌を盛れる一腕を喫せる如き狂

態を演せずは止まざらんとする。

生活の必需品は生産法の進歩により益々過度の給供を吾人に與へ、吾人は生活の必需品に就き何の不足を訴ふる所なきに至らん。然れども唯自家の富榮を矜誇せんとするに至れば、是れ必用の問題にあらずして、貴重珍貴の物品を消費するの問題となる也。一投梭間に長年月を費せる熱心なる労働を消費するの問題となる也。奢侈の要素は實に茲に存して不人情ある分子亦此處にあり。是等貪婪飽くなきの肉慾を急激に滅殺するは容易の業にあらざるも、永遠には此種類の惱亂を整理し得るの日あらん。

吾人が前述せし如く。ポードリラー氏は、奢侈の第三動念を人間修飾心に歸せり。彼の言によるに「此性質は兩者最も相接近するときにて尙外觀を飾るの念より分離し得べく、又此性質は第二因たる欲望を助長することあるも全く之と區別することを得べし」と。眞に然り。此性質は粧飾的技術、並に産業上の技能の本源にして而も亦人間本然の美質なり。歴史前の種族すらも、骨の小片に彫刻し馴鹿、並に海狸の皮に描寫して其美的萌芽を胚胎せるを見れば、是れ人性の自然に發生するものたること疑を容れず。而して此性質が漸次、開發せられ醇化せ

られて美的觀念、即ち建築、繪畫、彫刻等の技術を賞翫する觀念となる也。是れ實に文明の原動力にしてあらゆる時代、あらゆる國民を通じて純潔なる公共の快樂を附與するものたるを以て、吾人は常に之を排斥非難せざるのみならず、務めて之を保持し鼓舞せんとす。古代希臘人の如く之を家屋、家具、什器、其他のものに應用せば人間の趣味を改良して、文明進歩の動機となすを得べし。彼の心なき動物すらもが、色素の美麗、曲線の配合によりて誘惑せらるゝを以て動物學者は之を以て種族進化の大原因（ベシエス）となせり。故に美を愛するの性質は富を悦ぶの情

慾によりて腐蝕せられざる間は、人間種族の進歩を促進するものたること更に言を待たず。婦人嫁資の制度を廢止し、社會状態の平均を樹立せば、強壯秀俊なる男子は優雅娟美なる處女と結婚し、其結果として強健快活なる兒孫を擧ぐるを得べし。今日にては裏天韃韃も富の力を以て婦女を漁し、其缺損せる性格形体を後世に残すを以て、人種は益此状態の不平等の爲に頽敗せられつゝあり。美を愛するの心、修飾の念はそれ自身に於て決して排斥すべきものにあらず。若し是等の性質にして純白ならしめば、快樂を材料の高價なる點に求めずして、却て色素

の配合と、光線の調和に於て其價値を定むるを以て、毫も奢侈を助長することなし。寶玉を以て鑲めたる金銀の肖像は好趣味と相反し、カゾリック教會に散見する此種類の畫像は厭惡すべきものなり。何物か能く半ペーニに値せざる焼粘土を以て作られたるタナグラの肖像より幻妙なるべき乎。Mates iam Superad opus te fū 詩人の語が適用せらるゝ時代は確かに技術零退の時代にして、汝は「ヴェヌスを美にする能はざるが故に富ましめたり」とは希臘の詩人が彫刻家に與へたる冷罵なり。

ポードリラー氏は頗る巧妙に奢侈と技術の間に相違あることを論述せり。「美術は其目的、美的理想の實存なるに反し、奢侈は外觀を飾るを以て其主旨とし、美術の目的は公平なるも、奢侈は利己的なり。美と完全とは技術家の經營慘憺して追跡する所なるも奢侈に至りては矜誇の外何のある所なし。ヤードポンドの數量によりて技術品を購買する贅澤家は徒らに寶玉若くは織物に金錢を消費する意義にて技術を漁する也」。

ポードリラー氏は最後に奢侈の第四因として「變化の希望」なるものを附加す。是れ其大部分、時流を趁ふの性情によりて代表せらるゝものにして又現時の惡弊たる所

のもの也。往時にありては各其土地の産物に應じ、氣候の必用に迫られ各國は一定したる服装を有し、是等緻密堅牢にして而も長久に堪え得べき國民的服制は數代の間容易に變遷推移することなかりき。今日にては社會到る所殆んど同様の服装を見るも衣服の様式は年々變化して止まず。殊に婦人に於て最も甚し。例へば一人の有名な仕立師が新形の仕立方を工夫せば、パリより上海、ロンドンよりサンフランシスコと到る處前年の服装を放擲して之を採用す。流行の此轉變に原因する種々の弊害はポットリラ氏の説明する所大に其肯綮に中れりと信ず。

時流の轉變は輕跳の念を増長し、事物に熱中するの精神を攪亂す。「風采の閑雅を以て人に矜誇せんとするものは勢ひ其服整の爲に時間を消費せざるを得ず。而して精神を高尙ならしめざる如く衣服を研究するの弊を免れず」。是れ道徳上に於ける弊害なり。經濟上の弊害に至りてはジョン・パプチト、セー能く之を説明せり。曰く。「流行は未だ其實際の必用を失はざる物品を無用なりと思惟せしむるの慣習を馴致す。流行は消費を増加するのみならず、猶優等なる状態便利なる有様に於て存する事物を最早何等の役に立たずとして廢棄せしむるものなり。如斯流行

の迅速なる變化は人民が消費するものと消費せざるものとの兩方によりて國家を貧困ならしむ」と。例へば絹布、羊毛の製作に關し新意匠を出せりとせよ。其雛形、模様、回轉機、其他種々のものに就きて始に多くの失費を要すべし。而して其年度内賣捌かれざるものは賣れ残として廉價に賣却せられざるべからず。流行に後れ賣れ残りしものは殆んど半額に低減するに至らん。凡て是等の失費と損耗とは賣出の始に於て豫め取得せられざるべからず。然らずんば製作は收支相償はずして、遂に廢止せらるゝに至らん。故に流行の變化は著しく凡ての貨物の

價格を増加するなり。

吾人をして往昔の如く容易に變遷せざる國民固有の服裝を着けしめよ。一定にして恒久なる材料は年々春秋に變化する無数の様式に使用する費用を大に減殺すべきにあらずや。ルーメニアの女皇茲に見る所あり。自身ワラキヤ農民の清楚なる衣服を着し、國內の女子をして之を採用せしめんとしつゝあり。世人は之を以て嫌惡すべき單調に失して小説的光彩を欠くとなすか。諸子は又資本、科學、趣味の最も善き使用は流行を趁ふて遷るの徒の意を迎合するにありと思惟するが。婦人が彼等の化粧臺に

對して新案を出し常に衣服と流行を論ずる外、何等の爲す所なしと想像するか。

適宜にして高尚に又能く時候に適へる衣服は製作せられ得べし。材料仕立、並に色素の審美的觀念と攝生の原則とに適合したる衣服は多々益々案出せられ得べし。而して一たび是れ成るや又到る處に採用せしむるを得べし。英國に於て衣服の改良に賛成せる貴女の一團體が組織せられたるは誠に悦ぶべきことに屬す。人或は曰ふものあり然らば何故に急激にカルメライトの如き上衣、若しくはカプキンの如き禮服を採用せざるかと。然れども是等

の衣服が十八世紀の間、終始變化することなくして今日に至れるは全く深邃なる宗教的信仰に出たるものにして容易に摸倣すへくもあらず。兎に角、事物の標準を永遠の方向に向はしむるは、虚誇心の發生する瑣事小故より人間の精神を離隔するの方便なり。希臘の彫刻より第三、四世紀の淡畫に至るまで古代の技術が悉く同様ある形體を存することは頗る注意すべきことに屬す。

閑居と人工的優雅は鄙陋の情を喚起し、時流の轉變を發生せしむ。法律にして能く整頓し、人間の精神にして更に高尚に赴き、人間の頭腦にして一層良心を以て充實せ

らるゝに至れば、吾人は遂に古人の如き有様に到達するを疑はず。

第四章

奢侈は不正なり

前章に於て既に奢侈の動因を説明したれば、吾人は次に奢侈に就き如何なる見解を抱懐するかを述べんとす。元來、奢侈の議論に關しては硬派即ち絶對に奢侈を排斥するものと。軟派即ち奢侈は國家にも個人にも必用なりとするものと。二派あり。彼のポードリラー氏の如きは實に此二派の中間に介在するものにして、或奢侈は公平に

して許容すべく、寧ろ稱賛すべきも、或種類の奢侈は不適當にして不道德ありとせり。余輩は此區別を認めず、硬派の説全く信なりと主張するものなり。古代の聖賢哲學者により、教會の師父により、教壇の辨者によりて最も公平に最も激烈に奢侈に向て加へられたる辯難攻撃は、近世の科學研究により益明瞭とあれり。彼等は未だ經濟學を知らざりき。然れども彼等は正義の觀念によりて鼓舞せられ、基督の徒は慈善人情の理想に驅逐せられて此眞理を唱道せる也。

奢侈は其實質の何たるを問はず、悉く不正、不道德、不

人情なり。吾人をして經濟學の泰斗、ジョン・バフチスト、セーの言を傾聽せしめよ。彼れ曰はすや「偉大なる才能と偉大なる權力を有する人にては奢侈趣味を擴張するは國民の幸福を毀損する罪を免れず」と。予が既に述べし如く、奢侈は自己の不正當なる必用を満足せしむるが爲に大なる勞力の結果を消費するによりて成立す。人間の正當なる慾望を満足せしめんが爲に尙ほ多くの勞力が要せられ、社會多數の人間が尙ほ殆んど全く困弊しつゝあるに當り、贅物生産の爲に此貴重なる勞力の大部分を横領し去るは果して好事にして又正當なるべき乎。予が

ポードリラー氏と説を異にする點を明瞭ならしめんが爲に彼の擧げたる、ダイヤモンドの例を擧げん。ブランドン・キー氏が其著書「光の山」に於て、婦人等がダイヤモンドは粧飾品中、割合に最も廉價なるものとし常に之を珍重すと雖、我が見る所によれば斯程馬鹿氣なる不用のものなしと曰へるに、ポードリラー氏答へて曰。既往十年のことは兎に角一千八百七十八年には一個の價三千五百萬ポンドの金剛石を發掘せり。即ち之を採掘する爲に二萬人の勞働者を要し、之を彫琢する爲に和、伯、佛に於て三萬人の玉工とを要す。是等の職工、勞働者は其未熟

のものにても半クラオンの給料を得、老練のものに至りては十二シリ、ングより十六シリ、ング迄の賃金を儲くるなり。是れにても尙金剛石は社會に利益なしと云ふ乎と。是れ實に誤解の甚しきものにて、我見る所によればダイヤモンドは獨り無用なるのみならず有害のものたり。支那人は年々英國より一千六百萬ポンドの阿片を購入す。是れ實に無用なるのみならず又有害なり。支那帝は英國が支那に押賣する阿片を悉く海中に投入して可なり。是等は實に吾人が虚偽の富と稱する所のものなり。バステヤの曰ふ如く富が労働より成立すとは眞の *Sisyphism* に過ぎず。

即ち労働の爲に労働するに過ぎず。假令ダイヤモンドの爲に數萬人の労働者は高價の給料を得て、店舗、鑛山に勞役するにもせよ、彼等の發掘し、彼等の彫琢しつゝあるダイヤモンドにして單に其所有者の虚誇心を挑發し、所持せざるものをして痴妒の悪感情を曳き起すに止らば果して社會に利益あるか。労働者は海底阿片を携へて眞珠を探るに如かず。若し此等同一の職工が一物をも有せざるものゝ爲に、シャツ、靴足袋等の製作に使用せられしならんには社會を裨益すること果して幾何ぞや。吾人の見る所にては一人が四百ポンドの舞踏服を着用するよ

りは五十人の婦人が各自一ポンドを値する一領の衣服を纏ふを遙かに希望すべき也。我輩は(Sumptuary Law)費用制度を主張するものにあらず。然れどもノルウェーの如く又瑞西山間の土地の如く、一人の金剛石を有するものなきも、各人充分なる衣食の資を貯ふる國を賛す。贅澤物は多くの勞働によりて成り、此勞働は有益なる事物に利用せらるべきものなる事は最も注意すべき要點にして而も往々忘却せらるゝ要點なり。予は此等の點を一層明瞭ならしむる爲に一個人の例證を擧げて之を説明せん。若し個人にして自身の使用すべきものを自身にて製作せ

ざるべからずとせば、誰れか三年の長日月を費して是等無用の寶玉を彫琢するの愚をなさんや。此自明の理が往々にして曖昧の裡に葬らるゝは全く交換の現象によるものなり。換言すれば生産する人と使用する人とを異にするに依る。人間全體を個人と假定し、個人が自個の勞働により自個の必用を給供すると想像せよ。誰れか靴なくして徒歩するに當り、依然としてダイヤモンドの琢磨に従事するものあらんや。如何なる國民も一定時間の勞働を有するを以て、若し其時間の大半を贅澤品の製作に使用する如きことあらば、國民の大半は生活の必需品に缺

亡せざるを得ず。支那皇帝嘗て曰へるあり。「若し我臣民の一部にして遊惰逸樂、労働するなくんば、國民の他の一部は飢餓に泣くに至るべし」と。寶石を得るが爲に礦山を發掘し、又埋没するは何等有益のことにあらざるを以て眞正の生産にあらず。

我輩のポードリラー氏と論争する點は、氏が有害ある奢侈を痛論せるにあらずして、有益なる奢侈も成立し得と明言せしにあり。我輩の説によれば奢侈は悉く有害にして必用なる奢侈決して存在することなし。奢侈なる言葉はそれ自身既に罪過の意味を有す。是れ則ち予がポードリ

ラー氏と相反對する點にして他の部分に於ては全くポードリ氏に賛同す。殊に氏が奢侈の弊害を論極して餘蘊なきは最も我意を得たり。彼れ即ち曰く「人は先づ奢侈が人間の元氣を消耗し、人心を腐敗せしむるものなることを注意せざるべからず。又奢侈は愉安苟息の心を養成し、輕佻浮薄の念を増進するものあることを忘却すべからず。

奢侈は又社會の生存には最も必用なる身を殺して仁を成す如き精神を滅殺すると共に、善に向ひ惡に抗する克己心を没却す。故に奢侈の人は昏々として唯、歡樂遊興の裡に生息し、公共慈善の心の如きは蕩然としてあるなき

を常とす。歴史家道德家によりて指摘せられたる奢侈に随伴する品性の墮落、國家の轉沛歷々として指點し得べし。今日、富豪の淫蕩豪華殆んど其極度に達せり。吾人は是等の奢侈が持ち來たす必然の結果を豫想して流涕長大息に堪へざる也」と。

ホードリラー氏は他の章に於て、彼のジャンジャック、ルソーが巴里市を痛罵せる言を概括して引用せり。(尤も彼は之に附加して、人間の奢侈により取得せる利益を統計的に列擧論述せしも) ルソーの言ふ所を略述すれば「此巴里の都府は奢侈、腐敗の生産地あり。人間の欲望

が無限の刺激によりて興奮せらるゝも此處にして、歡樂のあらゆる種類が相和して沸湧するも亦此處なり。凡ての虚飾と、凡ての惡徒とは相前後して此處に跋扈し、有用なる製作は輕浮なる手工の爲に壓倒せられ、眞正の美術は、只少數者のみの娛樂に供する贅澤物の爲に壊滅せられ、極端ある榮華と極端なる零落との對稱は刻々に廻轉し、一方に檻樓、裸褐の徒相率ゐて群集すると共に他方には贅澤の凡ての配合相反射し、此處に金殿玉樓の燦然たるあると共に、彼處には火氣なき竈あり。上流の浮華、淫靡其極に達し、上流榮華の分配に關らんとして焦

心苦慮しつゝある下民の亂暴獸行亦到らざるなし、彼等下民の垂涎措く能はざる誘惑物は滿都に充塞し、黄金、寶玉、美服等凡て彼等貧民の嫉妒を買ふの具は到る處に陳列す。事物の此有様よりして何物をも有せざる貧民が彼等餘裕あるものより快樂の割前を請求せんとして懊惱煩悶しつゝあるは容易に察見し得べく、胸中鬱勃の不平は暗々冥々の裡に温釀孵化せられて大禍難を爆發せしむるに至るは智者を待たずして豫知し得べし」と。ポードリラー氏が過激かりとして非難せし如何なる硬派と雖、奢侈に對して是より激烈ある痛罵をなし得べきか。ポ

ドリーラー氏が或種類の奢侈（勿論、適當にして不道徳ならざる）は人間事業の刺戟として欠くべからざるもの也と論せしは、到底我輩の賛同する能はざる處也。予は、ジョン、スチアト、ミルが「野蠻人をして今日草莽野蠻の境界より脱却せしむるには、彼等に新奇なる欲望を與へ、之を満足せんとして勤勞せしむるに如かず」と言ひし言葉を否定するものにあらず。然れども歐州の人民はとりては最早消費の希望を以て惰眠を警戒するの必用ありし。ポードリラー氏はロンドン、スチールの地窖の裡に勞働するの徒が、其暗黒塵土の境遇に安じて更に高尚

清秀の生活を思はざるを見て、彼等に新奇ある欲望を與ふるの必用を説けるも是れ大なる誤見なり。是等零丁孤苦告ぐる所なき人民は欲望なきにあらずして其欲望を満たし能はざる也。彼等は終日勞苦倦極して僅かに生命を維持するに足る費用を儲くるに過ぎざれば、到底其以上の必需品を供給する能はず。佛國の如く富める國民にてすら其大多數は豪農の豚小屋よりも倭少汚穢ある家屋に住居し、攝生の許さざる鹿衣粗食に露命を維持するにあらずや。故に是等の職工勞働者が勞役辛苦するは、新奇なる欲望を獲得せんが爲にあらずして、生活を維持せん

が爲あり。然れどもポードリラー氏が他の章に於て「愚人等よ、汝等は無限の趣味ある生産を廢絶し、金銀、織物、象牙、寶石の勞作に數萬の職工、技術家を使役し、之によりて將さに何を得んとする乎」と論じ。更に佛國が過剰の生産をなせりとの愚論を反駁して、「如何なる點に於て佛國は過剰の生産をなせりと云ふか。生活に有益なる生産の全額は果して過分ならば。何故に大部分の人民は赤貧なるか。若し果して佛國に於て過剰に生産せられたる物品あらば、我れに其何たるを示せ。それ果してフランネルなるか、否然らず。多數人民は凍死しつゝあ

るにあらすや。穀物なるか、是亦然らず。多數人民は麴麩を有せざるにあらすや」と曰ふに至りては能く我が意を得たり。

象牙、寶石の製作に使用せられたる職工にしてフランネル、穀物等の有益なる生産に移轉せらるゝに至れば、此問題自ら氷釋せらるべし。労働の分量は同一なるべきも其結果は更に有益のものたるべし。ポードリラー氏曰く「然れども汝の禁せんとする贅物と、汝の増加せんとする必需品とを區別し得るか」と。奢侈の觀念が關係的にして、其物の奢侈たるや否やは生産方法の如何によりて

決せらるゝこと明なり。器械の進歩が凡の人間に其財貨を享有せしむるに至らば、今日奢侈たるものも明日奢侈たるの性質を失ふに至らん。然れども贅澤物と必需品との區別に至りては實に容易なり。即ち自身が労働するに當り費用、時間、困難を要するも奢侈にあらすして、自個利欲の爲に社會の労働を有益の事業より剝奪するは奢侈なり。此場合には、吾人は贅澤物の爲に必需品を犠牲にし我同胞の勢力を濫用するの罪を免れず。

第五章 奢侈は道德進歩の原因に

あらず

ホードリラー氏が「奢侈の歴史」の一節に於て「**欲望の** 制限的の範圍は卑下の表彰にして、物質的欲乏は道德の發達と比例す」と。是れ文明の發端に於ては眞理なるべきも今日にありては最早眞理にあらず。人は欲乏の刺戟により初に粗造の道具、例へば粗惡なる燧石、火に燒きて強固にせられたる棒杭、先の尖りたる骨の小片を以て勞働に従事し、漸く進歩するに従ひ金屬製の器械を使用

するに至る。彼のルドウキツヒ、ノイルが傑著「**道具**」に於て器械進歩の階梯を論じて云ひし如く、人間は言語を創出し智識の高度に進歩するや、彼等は直ちに自然力の觀察を聚合整頓し、所謂社會的干係を設立し、野蠻の狀態を脱却する也。是に於て人間は狩獵貪食の肉食の境遇を超越して、平和秩序の農業時代に進歩す。而して大なる生産力の結果として生ずる閑暇餘裕は遂に智識的道德修養の大部分を人類に献貢す矣。

ポードリラー氏更に詳論して曰く。「人類は外界の事物を改易せんとしつゝある間に、自ら又其教育を開發す。人

間社會の進歩するは豫め進歩せんとして進歩するにあらずして、不識不知の間に進歩するなり。労働は自ら人類に新生面を開き、新技能を興へ、新人間を作る。労働は人の深謀熟慮を要求し、人をして目的と手段の干係を豫想せしむるのみならず、自個と他人との關係、相互相保佐するの關係を設立し、所謂社會的生活を發生せしむ。而して此社會的生活は各種類の勞作生産の交換により益々其範圍を擴張するなり」と。

作に集注せらるゝときは、吾人生活の要素にして又高尚なる目的に向て使用せらるべき時間の浪費にして、而も精神的修養を毀損し、家族的、社會的の文化を攪拌するものなり。

人間欲望の極端なる發達は文明進歩の表彰にあらざるのみならず、極端なる欲望の増長と、極端なる欲望の醇化とは其時代の腐敗、優柔、頹廢を證明す。羅馬帝國の實例豈適當なる標本にあらずや。ロッセルは能く此點を論じたり。彼のセネカーが羅馬皇帝カリグラに就きて「*Nihil tam efficere concupiscibat quam quod posse effici negaretur. Hoc est luxurie pr-*

oposetum gaudere perversis」と言へりし如く、世には實際出來得べからざるものを希望し、最も不正なるものより快樂を享有せんとする人あり。如斯の人は天然を蔑視するものなり。如斯の皇帝は之を渡過せしめて戎車の盛觀を矜誇せんが爲にペーエーとブキヲラの間に橋梁を架設することも敢てせしなるべし。如此の皇帝は其尊嚴を衒耀せんが爲に山を崩し谷を埋むることさへ仕兼ねまじ。希臘の戯作者、エソップは其豪奢を衒はんが爲に、能く人語を解し、五萬六千ポンドを價する鸚鵡の舌を客に饗し、ホルテンシウスは數百年貯藏せる葡萄酒を樹木に灌漑して

自ら光榮とせり。余は最早是等の例證を列舉せざるべし。是等に類似せる虚榮の出來事は人の能く稔聞熟知する所なるべし。是にても猶慾望の發達と道德の進歩との間に必然的密接の關係ありと云ひ得る乎。

一國の生産力によりて其國文明の程度を測定せんとするは、經濟學者の習慣にして又一般人民の輿論なり。是等の人々の思考に依るに、製鐵の噸數にして超過し、綿糸の分量にして増殖し、輸出入品の價額高にして巨多となれば文明進歩の目的なるもの到達せらるゝなり。如斯國にありては宮殿の粧飾、食卓の排列は燦然として富榮の

光輝を放たん。人目を眩する瓦斯燈の光、奇麗に拂拭せられたる玻璃窓のうちに陳列せられたる精巧艷麗の黄金寶玉は又能く文明の外観を潤飾するならん。然れども顧みて裏面を伺へば貧民の大多數は尙ほ公共費用を以て養育せられつゝあり。人民の三分は全く無學文盲にして、他の三分は衣なく食なきの悲境に沈淪し、其處此處に牢獄擴張と軍律發布の談話は聽かれつゝあり。言ふを休めよ。是れ實に世界中の最文明國なるぞと。吾人は他の國民を知る。彼等は自個の努力によりて生活に必用なる衣服飲食を支辨し、各人一定の教育、安慰を有して、奢侈

遊惰の徒なきと共に路頭に彷徨するもの稀なり。而して此等の國民は人の稱して退歩的國民と呼做すところのもの也。是れ實に極端なる誤解にして最も重大なる惡結果を社會に及ぼすものなり。

人は二様の存在を有す、従て二様の缺望を感ず。即ち肉體上の缺望、精神的缺亡是なり。單に肉體上の缺望を満たし、五管の満足を買はんとするものは、富と權力との餘榮により殆んど狂氣に類する極端なる自個の私慾空想を充實せんが爲に萬人をして其命を奉せしむれば足れり。狂奔せしむれば足れり。然れども精神的缺望の爲に生活

する達人高士にありては少許の物質的欲乏、亦充分にして、甚しきは人間第一の必要さへ放抛するものあり。一方にヘリオグラフィ、若しくは自個、奢侈榮華の爲に羅馬の緑門を作れるトリマルキオンを擧げ、他方には蝗蟲と蜂蜜とに生活せしジョン、バプテスト、天幕を織成して麴麩を得たるセントポール、時計の硝子を琢磨して晩年を送りし、スピノザの如き人物を取り來りて對比一番せは思、半に過ぐるものあらん。技術の泰斗、ミケールアンゼロ嘗て其友コンデビに向て「假令余れをして富貴ならしむるとも、余は貧人の如く生活し得るならん」と云ひ

しにコンデビ答へて「然り。汝は是迄常に富人として生活し得べきに窮寒依然、毫も顧慮するなきを見れば、其然るを信じて疑はず」と。吾人は是等何れの部面に於て道德的進歩の標本を見出さんとする乎。

或程度の文明は欲亡を要求するも、更に一層進歩したる程度に至れば欲亡を滅却す。人間正當の欲望は合理にして又善良なり。蓋し吾人は體力の強健なくして智的勞作を爲し能はざるを以て充分に其發達を謀るの必用あればなり。然れども贅澤なる欲望に至りては他に利用さるべき自己並に他人の勞働を浪費するものなるを以て不道德

にして且つ不正なり。一國人民の思想を變更せし如き大改革家、例へばモセス、ソクラテス、釋迦、基督の如きは皆實に少許の必需品にて生活せるにあらずや。人間の性情を純潔ならしむるの光明は奢侈の神龕に發せずして却て質素簡樸の茅屋に起り、道德の發達は欲望に正比例せずして却て之と反比例す。

彼の有名なるレナン氏は之に關して長く記憶せらるべき意見を吐露せり、曰く「世人誤解の點は産業を善良且つ有用なりと宣言するにあらずして、餘り多く贅物の完美を追求するにあり。假令人生の目的が幸福にありとするも、

此等の贅物なき古代に於て圓滿なる幸福が既に甘受せられしのみならず、古來の聖賢が大なる理解力を以て熟慮せし如く、文明には唯精神的、智識的偉大のみが必用なるを以て、瑣事、贅澤は決して無限に改良せらるゝことを要せず。是等の瑣事贅物は文明に何物をも附與せざるなり。歴史は物質的狀態の粗野なる時代に於て人間が高尚なる智識と、幸福の黄金時代を建設したる巨多の例證を供給するにあらずや。印度に於ける釋迦の時代は其外界の事物より論すれば今日の最未開國と優劣なかるべきも、哲學的想索に至りては現今獨逸を措きて世界中之と

拮抗すべきものなし。又驚くべき深遠幽邃を以て吾人に
 道徳を教ゆる基督教は、殆んど我田舎生活よりも遙かに
 劣りたる簡單なる境遇の裡より發生せり。故に吾人は技
 術の進歩は人民生活情態の進歩と隨伴せざるのみならず、
 生活方法を以て其重要なる目的とする社會は技術の發達
 を庶冀するに足らずと斷言して憚らざる也。

第六章 奢術と器械的進歩

余は又他の方面より奢侈を論せんとす。彼のバスタチアは
 平素、其著書の大部分に於て欲望の中庸を唱道せるにも

拘らず「經濟的調和」なる著作に於て奢侈を以て正常な
 るものと解釋し、其見解は眞面目にして變易すべからざ
 るものなることを主張せり。彼曰く「人間の欲望を以て
 不變なりと誤解し、人間の嗜欲を無限に擴張するを不必
 用なりと説明するの徒は到底、器械、外部競争、奢侈等
 の問題に關し充分なる解答を與ふる能はず」と。吾人若
 しバスタチアの說に従て經濟上の問題を解釋せば、人類は
 常に其欲望を増加し精撰すべきものにして、經濟學は古
 今道徳教の變化と共に浮沈すべきものと論斷せざるを得
 ず。バスタチア又曰く「世人往々吾々を非難して、經濟學

者よ、汝等は常に科學が道德と一致すべきを主張しあがり、今奢侈を正當なりとする矛盾轉倒も亦甚しからずやと論結するものあり。然れども汝等固陋なる哲學者、並に道德の説教師よ、汝等は原始時代の人間の欲望を以て満足せんとする乎」と是れ非なり。哲學者の論結は兎に角、之を別問題なりとするも、パスチアが奢侈を必用ありと論結せるは大に非なり。

パスチアが議論の衝撞は、純正經濟學の原則によりて容易に證明せらるべし。彼曰く「器械は勞力を節約す。故に器械が増加せられ完備せらるゝに従ひ、より僅少なる

時間の労働によりて従來と同様の生産高を獲得し得べし。労働時間の減少は労働者需用の減少を意味し、労働者の大多數をして職業を失はしむることを意味す。故に是等の労働者に職業を供給する爲には、是等の器械の爲に節約せられたる時間を要求する如き新なる必要起らざるべからず。人間欲望の無限なる擴張は經濟上實に避くべからざる事實にして、若し之をくれば科學器械の無限なる進歩は時々刻々に増加する多數の労働者を餓死せしむるに至らん。是れ經濟上の發達によりて吾人に表明せられたるところ也。生活の必需品が容易に取得せらるゝや、

贅物は續々として發生し。高價の珍玩奇具は燦爛として店舖に整列せられ、又社會の多數により購求せらるゝに至るべし。是れ余が器械を抑壓するにあらざれば、奢侈を嚴禁するか若しくは職工の多數を消滅に歸せしむるの外、救濟の途なしと言ふ所以にして、一派の經濟學者が古代の如き有様に社會を措置せんとするは、又是れか爲なり」と。

余は、古代の道德家、教會の師父等が吾人の食欲、欲望を制限すべしとの訓戒を正當なりと信ずるが故に器械の問題に關しても亦ガスチアと見解を異にす。余の信ずる

ところによれば即ち左の如し。器械は一層迅速に生産し得るを以て従つて従來よりは一層巨多の生産物と一層過多の餘裕とを吾人に附與す。我輩は、吾人の正當なる缺亡が満足せられたる曉に於て、吾人の務むべき事業は奢侈的欲望の満足の爲に贅物を製作するにあらずして、吾人の餘裕と精神の開發、社會の改良、美術天然の高尙なる快樂に適合するにありと主張する也。今假りに人間社會を孤島に漂流せるロビンソン、クルソーに比較せんか。最初、彼は唯生活を維持するが爲に終日終夜勞役せざるべからざりしが。後に至りて彼は種々の改良器械を發明

せるを以て、一日、六時間の労働能く彼の正當なる欲望を満足するを得るに至れりと假定せよ。吾人は隨意に處分し得べき殘餘の六時間を錦繡、毛皮の製作に消却すべきか。人間の精神にして高尚に、其教育にして進歩すればする程、如斯瑣事、冗物を事とせざるべし矣。

器械は人間苦難の解放者と稱せらる。然れども若し器械にして一層貪慾の泥滓中に吾人を驅逐するに止らば、此稱號を附する能はずして、人間を勞苦倦極の慘狀より救濟し得て始めて人間の解放者と稱すべきなれ。ジョン、スチアド、ミル言へり「器械が一人、一時間の労働を減せり

とは頗る疑ふべきことなり」と。嘗に然らざるのみならず今日にては人間の労働は從來よりは一層過度に赴けり。古代にありては人々拉丁の詩人が記載せる如く「安穩に心配なく睡眠する」を得たり。今日生産事業の敏活なる結果として、多數の人間が終夜眠らず、礦山、砂糖製造場、鐵道、電信の事務に鞅掌しつゝあるにあらずや。ハムレットが云ふ如く労働者をして晝夜、困頓勞苦せしむるは果して何の爲ぞや。現時、文明國に於ける生活の困難は實に非常にして腦髓の使用更に甚しきものあり。社會の上流より下界に至るまで、上は混雜なる事務の爲に

忙殺せらるゝ國務大臣より、下は地下に勞役する礦夫に至るまで人間社會は蕩然として器械の奴隸となり終りぬ。器械が人間を自由にすとは決して如此の謂にあらざるべし。吾人は先づ第一に人類をして一層低度の正當なる欲望に満足せしむると共に、次には高尚なる智識を開發せんが爲に、一層の餘暇を附與せざるべからず。人或は曰はんとす。「汝の屢々繰返せし正當なる欲望とは何ぞ。誰れか正當、不正當の限界を劃し得るものぞ。汝は吾人をして再び櫟の實を喰ひ、獸皮を纏ひし野蠻の狀態に歸屬せしめんとするか」と。我輩が呼んで正當の

欲望となす所のものは、理會力の認許し、攝生の決定したる欲望を意味す。如何なる食物、如何なる衣服、如何なる家屋が最もよく時季に合し、氣候に適ふやは衛生によりて容易に決定し得べく、産業の進歩は各用品の價額を低廉し殆んど各人資力の範圍内に於て是等の財物を辨するを得せしむべし。ジョン・バプテスト・セーは奢侈を定義して「稀少にして高價なるもの」となせり。高價なるものは多くの勞働と、多くの時間を代表す。若し其財貨にして單に奢侈的欲望を満たすに止らず之を購求するを止めよ。消費の正當なるや不正當なるやを決定するに於

て毫も困難なることなし。吾人は其財貨を使用して、果して其生産に要せられたる勞力と時間に相當する満足を享有し得るかの疑問は、恐らく凡ての場合を決定するに於て餘あり。

ホードリラー氏は、奢侈は重に贅なるものより成立すと説明するも、余は寧ろセーが高價なるものとの説に左袒す。ホードリラー氏の與へたる例證に就きて云へば、日本の扇子の如きは極めて廉價なるものなるも、只僅少の勞力によりて製作せられ、其勞力に相當する快樂を人に與ふるを以て之を奢侈品なりとは論する能はず。又農夫

が一ガロン八ペンスに賣らるべき手製の酒を飲みしとて奢侈なりとは曰ふ能はず。反之、富豪が一瓶三十三シリングに價するヨハニッスベルグ、ワインを飲用せりとせよ。其費用は彼にとりて眞に九牛の一毛たるべし。然れども彼は此飲用によりて人間廿日間の勞力を空しく消費せり。此廿日の勞力をして人生第一の必要に轉用せしめば得る所果して如何なりしぞ。此等の貴重なる勞力は一富豪につまらなき快樂を與ふる爲に消盡せられたり。此際に何人も勞力の空費を否定せざるべし。假令、交換の複雑なる現象は是等自明の理を隱匿すと雖、一般人が

是等の馬鹿氣たる浪費を非難するに至れるは、既に這般の事理を認識せるに依るなるべし。「労働者が復讐に向て喚叫するは世に浪費あるが爲なり」との諺の如く、多數人民が飢寒に泣く所以のもの實に他に人間の時間勞力を浪費するものありし也。

神の眼よりして我地球を見下し、幾萬の人間が、他の極端なる幾萬の貧困者と相駢列して、寶石、錦繡の如き贅物、亞片、酒の如き有害物を製造するに孜々たるを見玉はば、人界の事物は如何に痴愚にして又如何に狂態と感得せらるゝあらん。實に吾々は未だ充分なる食物、充分な

る衣服を有せざるに先づ區條、粧飾の製作に貴重の時間を消却しつゝあり。彼の偽辯家等が奢侈を正當として我教會を瀆し、我大學の講堂を腐蝕せし前既に早く、教會の師父はゴスペルの光明に誘道せられ、經濟學の大家は科學の歸納に教示せられて吾輩と同一の論結に歸着せり。

第七章 奢侈問題の三方面

奢侈は三の異りたる方面より觀察するを得べし。第一、道德上の問題として如何なる程度の勞力は人間技能の正當なる發達に有益なるか。第二、經濟上の問題として如何

何なる範圍にまで奢侈が富の蓄積を左右すべき乎。第三、正義權利の問題として、奢侈は果して生産物の公平なる分配と一致すべきか。人間は奢侈により其有用なる勞力に相當する報酬を獲得すべきか。

此問題の第三方面は未だ之を論究せる人なし。正義の觀念が經濟上の分配に適用せらるべきこと一般人の認識するところとならず。されど吾人は慈善を以て積極的義務となせる基督教が奢侈の、無用不正の事物に人類を驅進するを見て、極力之を非難せしことを忘却すべからず。

第八章 奢侈と理想的生活

予は先づ奢侈を個人の點より觀察せんとす。奢侈は個人にとりて有益なりや、否や。吾人をして假りに個人の社會同胞に對する凡ての關係、慈善、正義の要求する或ゆる社會的義務を度外視して考一考せしめよ。以上の問題を決定する爲に吾人は勢ひ「人間の幸福は果して那邊にあるべき乎。人生の目的、運命は果して如何なるものなる乎」を闡明せざるべからず。人間の到達すべき目的は實に或ゆる技能の開發にありて、人生の幸福亦其裡に胚

胎す。

七十六

厭生主義の人或は吾人に反對するからん。彼等常に謂て曰く。「吾人の智能が開發せらるれば、せらるゝ程、吾人は不幸の淵に沈淪す。思考する人の困難は腐爛せられたる獸類と相撰ぶなし。動物は萬物の靈長たる人間より幸福にして、植物は動物より幸福に、礦物は植物より更に一層幸福なり。故に皆無、即ち佛説の所謂虚無寂滅は幸福の最大なるもの也」と。余は茲に厭世主義を評論せざるべし。假令、シヨツペンハウエル、ハルトマン等の哲學者が如何なる議論をなすにもせよ、原素より起る廣大

無邊なる進化は唯人間をして連続せる困難の階級に導き、遂に失望に終らしむるが爲に開展しつゝありとは信せられず。生活の發端よりして人間が其自衛保全の爲に絶えず進歩發達しつゝあるは一般の方則にして、其成功は必ず満足、快樂によりて隨伴せらるゝこと疑を容れず。人間は毎に眞善美の方向に盡瘁せざるべからず。假令吾人が眞善美に接近するに従ひ割合に其幸福の度減少するは事實なるも、吾人、人類の運命は唯此浮世のみにて全く成遂げらるべきものならざること明なり。

人間の眞善美は、吾人の或ゆる心身の勢力と、吾人の或

七十七

ゆる感情、即ち家族、同胞に對する愛情。天然美術に對する美感を充分の程度に發達せしむるにあり。吾人は人間の眞善美に關して二箇の摸形相對峙して存するを見る。基督教と古代哲學是なり。古代の哲學者は同胞に對する吾人の義務、慈善、正義の觀念に就き、單に亂雜不確定なる要領を表示せるに止るを以て、此點に於て余は基督教の眞善美の理想の遙かに高尚なるを信じて疑はず。されど基督教は全く實體的フィジカル人間を没却す。彼等は人生の果敢なくして天國の近きにあるを心肝に銘して忘るゝ間なきを以て、其極遂に隱遁的臭味を帶ぶるに至る。是れ彼

等の世界觀より生ずる必然の結果にして又争ふべからざる事實なり。若し古代の基督教徒か確信せし如く此世界が直ちに終局を告げ、ゴスペルが豫言せし如く現時代は經過して神の世となるとせば、深慮の人は皆手を拱して神時の到來を待つのみならん。吾人が箇人生活の嚮導として此歴世的基督教を採用せざるは蓋し是が爲也。吾人にして此等の理想を養成せば人間社會は悉くアंकローイト、若くはステライトの道士的生活に終らん。予が標式せんとするは實に希臘的生活也。希臘の青年は居常其練習によりて能く其體力、技能を開發せり。彼等

は午前は體操の練習に餘念なく、午後は當時の哲學者、並に賢哲と談話するを慣習とせり。彼等は如斯して「*Mens sana in corpore sano*」の理想を實在せしめたり。

ペンサ其教育論に於て言し如く「爵位も、榮譽も、富貴も、巽懦纖弱の病者にとりては何等の利用をささるるを以て人間の第一に希圖すべき重要物は健全ある體格の維持にあり」と。希臘的生活は嘗て英國の大學に於て矜式せられたる如く吾人の模範たるべきもの也。唯手工業の缺乏と、奴隸の使役は希臘生活の缺點として見るを得べし。奴隸の使役は自然法の侵害にして、又避くべからざる

る腐敗を誘起するを以て、實に重大なる誤解なり。否寧ろ重大なる罪惡と稱するも可なり。天然は萬人に向つて労働を要求す。吾人は凡て或缺乏を有すると共に、此等の缺乏を満足せしむる爲に身體の器關並に智識を具備す。是れ凡ての有機物が皆自箇の勞力により生存せんが爲にあらずして何ぞや。若夫れ自箇の生存を維持するに必要なる労働を放抛して他人に委する如きは、其結果、必ず懶惰より生ずる憂鬱懊惱の不幸を見るに至らん。故に自然の法則に準據して出來得る丈其健康を維持せんとするものは、皆務めて筋肉の規則正しき運動を怠らず。希

臘人は大に注意して之を爲せり。彼等は其日の大部分を費し浴場若しくはマースの野に於て筋骨を鍛錬せり。使喚すべき奴隷なく、工業の發達により運動器械の大に進歩せる今日、吾人は大に體育を養成して遊惰腐敗の惡弊に感染せざるを庶冀すべきにあらすや。

古代の生活は極めて閑雅なりしも又極めて質樸にてありき。亞典、羅馬にては安樂富貴の人すらも尙今日吾々が必要缺くべからずと思惟する底の食事を有せざりき。ポソペイの古跡を訪へ、一見直ちに古人生活の狀態を了解すべきにあらすや。彼等は先づ何物に限らず美を主眼と

せり。公會堂、浴場、殿堂は勿論、私宅、庭園、床間、甚しきに至りては日常の什器家具に至るまで悉く技術を以て潤飾せり。彼等の欲望は甚だ鮮少にして之を満足する方法も亦至りて不備なりき。彼等の寢室は僅かに一脚の椅子と一個の箆筒を整置せる方丈の室にして、其筐底には今日の職工の衣服にも劣れる粗野の外衣を藏するに過ぎず。彼等の衣服は肩端に織物の小片を繡せる麻布の長下衣と、簡單なる毛皮製の外衣より成り、或る宗派の僧衣と撰ぶなかりき。時流の轉變は未だ彼等に知られず、彼等の衣服は千歳を閲して舊慣依然たりき。彼等が食物

の質素にして節約ある又驚くに堪へたり。當時猶贅澤家として目せられたる詩人ホーレスの詩句中に「食卓の上
に閃らめく食鹽を見出すの人は廉價にて幸福なる生活を
送るの人なり。……早く我家に歸りて食事に向はん、我
皿は韭、葱か、豌豆か、それとも肉の油煎をらん。……
ピタゴラスの最好物たる蠶豆。野菜を以て鹽梅せられた
る臘乾は何時我が膳に上るらん。」との語あるを見れば以
て當時の生活を想見するに足る。

亞典にては高貴の人と雖、今日のネーポリス人の如くし
て生活せり。彼のトルマルキオンの豪華を極めたる酒宴。

二三の帝王の浪費の如きは寧ろ専制君王の法外ある狂態
にして常度を以て律すべからず。是等の時代に於ては人
民の欲望甚だ稀少なりしを以て、彼等は皆安座して其技
能を開發し、美的快樂、國家の注意に奉事し、文學政治
を講究するを得たり。

近世の奢侈と無量なる欲望とは之によりて二様の不利益
を生ず。即ち此等無用の長物に拂ふの資金を得んが爲に
消費する時間、資金を散する爲に要する時間是なり。人
間社會は如斯にして混沌たる物欲の渦中に投入せられ、
精神的開發に要する餘裕あることなし。彼の守錢奴を見

よ。彼等は終日金銭の計算に惱殺せられ、彼等の財産は或ゆる人間の欲望を満足して尙餘あるに彼等は交睫まばらみもせず其資産を増殖せんとしつゝあり。彼等は自個の擔へる重荷の爲に壓倒せる、愚物にあらずして何ぞや。疑もななく彼等は生産の器械として必要なり。されど彼等は幸福に導き、眞美美に向はしむるの公道を歩行しつゝある乎。モンテスキウ曰へり「巴里の市には終生安穩に生活し得べきに尙且つ彼の財産を増さんとの欲念より其壽命を短縮する愚人あり」と。ニューヨーク商界の大王アストア、バンダビルト、マチユワートの如き皆二千萬ポンド以上

の財産を有して尙黄金の爲に懊惱苦慮しつゝあるもの此好適例にあらずや。

欲望、寡なきの人は心勞少なし。彼等は雲雀の如く又ラホントンのコツプラの如く終日和鳴して倦むを覺へざるべし。科學と器械の進歩により殆んど統計家が數字に窮する程、過大の富は生産せられたるに拘らず、吾々の時代は困頓悲痛の時代なり。現今の社會は從來の如く洪笑する能はず。又歡樂を見出すこと能はずして憂苦詐欺は到る所にあり。ボッセー其情慾論に於て「吾人が九天の純潔なる空氣を吸はざるべからざるの時に當り、吾人を

して志想の高尙なる平準より失墜せしめ、塵土に委せしむるものは肉欲あり」と論せしは能く其肯綮を得たるものと云ふべし。彼又更に凡て吾人勤勞を併呑する牢獄の何たるかを論じて「何故に汝等は真正の必需品をして虚誇の犠牲たらしむる乎。汝等は汝等の身體を毀傷する雨露を防ぐ爲に家屋を有せざるべからず。汝等は毎瞬時に消耗する汝等の勢力を恢復する爲に榮養物を取らざるべからず。汝等は疲勞せるときに休養し、睡魔來るときに就床して精神の沈靜を計らざるべからず。然るに凡て是等の必用をして悉く外界の孱弱を迎合する爲に虚誇

の犠牲たらしむるは抑も何事ぞ」と

ポッセーが抑制の教旨は往々極端に走りて嚴禁主義の範圍に侵入することあるも、以上の議論に至ては正當にして間然するところなしと言はざるべからず。吾人の必需品は皆悉く人間の弱點なり。不道德の補助なり。真正の幸福と、正義の追求を肉欲の犠牲とする誘惑物なり。高尙の生活、公正の行爲並に主義の信仰は概ね皆簡樸ある境涯に於て發見せらるべし。人の欲望が少なれば少なる程、義務の羈絆を脱すること多く、職業の撰擇妻子の係累、政黨の紛紜等の重大事件に拘束せらるゝこと寡し矣。

ヘルベチウスの告ぐる所によるに「英國に於て一内閣大臣が反對黨を買収せんとして一衆議員を訪問せしに彼は羊の肩と水にて食事を爲せり。而して大臣を顧みて曰足下よ我食事の質素なるは足下の申出を甘受し兼ねる證據なりと」

佛國革命時代の雄辯家ミラボーも豪奢の爲め遂に赫灼の名譽を失墜せり。彼にして奢侈放縱の生活をなすなからしめは、何の理由ありて王の養老金を受けて口を噤みしぞ。他の點は兎に角、此點に就て丈は、余は彼のジャン、チャク、ルーソーが諸方より雨下する凡ての贈與を

拒絶し、僅かに謠歌を賣りて生活せしに黨せざるを得ず。デオゲネス一日手掌を以て水を掬する人を見て直ちに椀を放抛して之に倣へり。掌を以て飲まんよりは椀を以てする困難少なくて満足多きが故に彼れデオゲネスの行事は不經濟なるを免れず、然れども其之を爲す精神に至りては景仰すべきにあらずや。予嘗て奢侈問題を論じて人も馬の如く蹄鐵を以て足を掩被するを得ば、之によりて靴、靴足袋、其他無用の所費を節約するを得べしと云ひしに、人皆噴飯我を渾名してサポテズム（馬蹄主義）と呼ぶに至りぬ。然れども予は飽までもボッセーが吾人

の欲望は凡て理想より斥け俗事に向はしむる人間の弱點なりと云へるの説を信じて止まず。吾人にして物欲だに微せば、凋おとろます汚よれぬ、ゴスベルの百合花の如くなるを得べく、又天然の美を樂んで山水に浮かれ歩行く人の如くなるを得べし。

我輩と雖、勞作は心身の健全を保持する必要條件なることを否定するものにあらず。然れども世界到る所殆んど人間を獸化する程の過超生産をなす必要果して何處にかある。固より状態を野卑にし智識を遅緩おらしむる如き克己、セント、ラブレーの如き不潔生活、東洋の托鉢僧

の斷食主義は決して許容すべきにあらず。然れども我現時の一般的傾向は欲望の精撰にあるを以て我輩は是等極端なる生活を稱揚して社會の防腐劑とせんとす。

予は彼の戰場に於ては老功。將よりも能く飢寒疲勞に堪え、物欲なくして哲學正義の爲に生活せしソクラテス並に彼の自若として牢獄、鞭笞、破産、貧困、萬死、……有ゆる艱難を嘗め盡くして真理の爲に真理を愛せるセントポールを現代の模型、青年の標本とし、奢侈遊惰の風を一掃せんと欲す。

第九章 奢侈と國民の繁榮

予は此章に於て國民發達の點より奢侈を論じて、果して或學者の主張する如く奢侈は國民の發達に好影響を與ふるものあるや、否やを講究せんとす。

之に關して世には一種の危険なる持論を有する人あり。即ち贅澤物に金錢を浪費するの人々は之によりて大に社會同胞を利用するを主張し、特に上流社會に至りては彼等の豪奢によりて此遊蕩の目的物を供給する幾多下層人民に職業を與ふとの同一誤見を抱懷するもの、如し。經

濟學の最も初步の智識は容易に此見解の如何に大なる誤謬なるかを指摘表示するに餘あり。

生産業の進歩は資本の増加により、資本は貯蓄によりて起る。而して奢侈の要素たる金錢の浪費は貯蓄と全く相反對するを以て生産業を進捗せしめざるのみならず。却て之を減縮す。予は茲にジョン、スチユアート、ミルが其經濟書に於て「貨物に對する需用は生産の方法を供給せず」と云へる格言を追想せざるを得ず。例へば予今天鷲絨を要するとせんに之を製作する爲には器械其他の使用品を要するなるべし。然れども唯需用の念のみにて資

本なくんば到底其生産方法を供給し能はざるべし。是等の資本即ち労働者に職業を與へ、生産に必用なる資本は自個の消費より生ぜずして、新生産業の爲に其欲望を抑制し、器械、道具、其他の使用品に費用を轉用するによりて得らるべきもの也。

又奢侈は労働賃金を騰貴せしめざるのみならず、却て之を低下す。抑も労働賃金の騰昂するは如何なる場合なる乎。資本が労働者の割合に比して迅速に増加する場合、即ち彼のコブデンが「二人の雇主が一人の職工を追ふて走る」場合あらざるべからず。

而して労働市場に於て二人の雇主が一人の職工を競争する場合、此雇主等が始め節約して多額の資本を貯蓄せる場合あらざるべからず。故に新に生産業に着手し、従来より一層多数の職工を使役し得るは、貯蓄にありて奢侈浪費によるにあらず。

勿論、富國に於ては國民の歳入甚だ大にして之を填補するに餘あるを以て事實上、奢侈が資本の増加を障礙することなし。是れ浪費者と蓄積するものとは相對峙して存し、一年十萬フランの收入あるものは其うちの幾分を割きて遊興の資とし、其殘餘を貯蓄し得るを以て奢侈が資

本を阻隔するてふ自明の理を事實より隠蔽するに過ぎず。彼の最近起れる財政困難前には英國に於ける年々の資本増加高は一億二千萬スターリングなりしなり。是等の増加せる資本は英國のみならず世界各國の新事業設計に使用せられたり。奢侈贅澤極りあき今日に於ても資本の増加實に驚くべきものあり。然れども若し勤儉貯蓄の風にして一般に行き渡りしならば資本の増加、新事業の勃興、今日と日を同ふして語るべからざるものあらん。奢侈は商業の繁榮に必用なりとは一般人の唱和する格言なり。ジョン・バプテスト・セーは此問題に關し一の面白き

談話をなせり。「彼の未だ分科大學の學生たりし頃、一日、日曜日に叔父の家を訪問せり。彼の叔父は資本家にして慈善を口にする人なりき。食事終りて後、叔父は俄かに精良酒の一瓶を空け捨て、酒盃を破碎して、凡ての人に生計を與へんと言ひぬ。年少のセーは驚きながら、然らば何とて食卓に満載せる凡ての器具、陶器を破壊し、或ゆる家材、窓板を粉碎して職工に職業を與へざるやと尋ねしに叔父は黙して答ふる能はざりきと云ふ。ネーローが羅馬の大火を下瞰して欣舞謠歌せしも亦此種の經濟主義を採用せしものならん乎。

佛國革命時の經濟學者にして又保護主義の首領なるサン、
シヤーマン巴里府全焼の場合を假定して「國民としては
其災厄を悲むも、經濟家として寧ろ之を悦ぶ」と公言せ
しが、彼の意は恐らくは火災によりて工事の盛に興るべ
きを豫想して而く大膽の語を放ちしならん。

是れ唯勞働それ自身のみを注目して、勞働の結果を観察
せざるもの、到達すべき必然の結論にして、彼のバステ
アが適當に *Sisyphism* と命名せる誤謬に陥りたるもの也。

經濟學にして常に此方向に進行するものとせば、經濟學
は是れ富の生産を教示する學問にあらずして、富の破壊

を奨揚する學問なり。是れ重大なる誤解にして一應之を
辯明論駁するの必要あり。

予をして再びバステアが「人は其見る所のものと見ざ
る所のものとを區別せざるべからず」と言ひし語を引用
せしめよ。灰燼に歸せる家屋を建築しつゝある職工は吾
人が見る所のものにして、此費用を以て他の職業の爲に
使用し得る他の職工は吾人の見ざる所のものなり。英國
の諺に曰ふ如く何人にも好く吹かぬ風は惡風にして、黒
雲の裏には銀光あり。セーの叔父は酒杯を破碎せるによ
りて硝子工場に勞働を興へたるに相違なかるべし。然れ

ども若し彼にして其冗費を節約して、椅子、食卓、若しくは新奇の酒杯を購ひしならば獨り自身を裨益せしのみならず、一般労働者に巨多の生活を與へしなるべく。自家の富、並に國家の富は之により増加せられたるにあらずや。

一千八百七十一年祝融氏の爲に烏有に歸せる巴里市の記念碑は今日再建せられつゝあり。是れ商家に多くの利益を與ふるに相違なし、然れども佛國は之に要する巨萬の費用を以て、他の記念碑を建築し、學校を創立し、鐵道を布設するを得たるにあらずや。要するに巴里市は新奇

の教育器關、交通器關に投入し得べかりし費用を犠牲として記念碑の再築に従事せるのみ。

吾人に反對するもの動もすれば即ち曰「それ然り、然れども汝のポルテコー、デオゲネスより直下せる議論に準據して行動せば商工業に従事する幾萬の人間は忽ち餓死すべきを如何せん」と。予をして例を擧げて此問題を論辯せしめよ。今茲に飲食、舞踏、其他種々の遊興に一年四萬ポンドを消費し、之と交際往復するもの亦其三倍の費用を支出すとせば際物師、仕立家、小間物商、理髮店、食料店の殷賑、繁榮云ふばかりなく俄然商界の黄金時代

を現出すべし。然るに古代に於ける教會の師父の如き嚴肅なる傳道者來りて奢侈を怒號し、社會又之に聞きて悔悟し、舞踏廢せられ、饗宴止み、社會が凡てクエーカー宗徒の禁欲的團體とならば果して如何。

商業家、銀行家は如何なる場合に際しても金錢を河中に投せざること明なり。然らば彼等は之を以て何事をなさんとする乎。彼等は之を利用せんとすること疑なし。然らば如何に之を利用するか。荒蕪せる土地を所有するものは之を資本として開墾し、培植し、排水するあるべく、又之に家屋を建築し、道路を開通するならん。工場を所

持するものは之を擴張せしむべく、鐵道に關係するものは益之を延長せしむべし。換言すれば凡ての人は投下せられたる資本の利息を欲するが故に他の有益なる労働簇々として崛起し、(金錢の同一額を消費して)人の財貨を空しく地下に埋没するの弊なきに至らん。如此すれば理髮店、飲食店、若しくは粧飾を鬻ぐ店舗の如きは大に衰退すべきも、勞力の同一分量は他の方面に於て活動し、職工の同一人數は以て食を得べし。故に是れ労働の壓迫にわらずして勞力方向の變換なり。

吾人をして奢侈と此想像せられたる場合とは國家の富に

關して如何に異りたる影響を及ぼすかを考一考せしめよ。舞踏の壯觀散し、饗宴の歡聲消せし後に殘存するところ果して何物ぞ。虚飾の面影に宿醉の不快のみ。神經の魔疲のみ。社會は之によりて二様の損失をなせり。——即ち財物の消失と人間勢力の耗弱、是なり。反之、想像せられたる場合に於ては、假令其有用ある事業にして廢止するも、一端能く排水し開墾せられたる田野は從來よりは一層多くの穀物を産出するなるべく、能く培殖せられたる深林は尙より多くの良材を附與するなるべし。又完全な設備せられたる器械は貨物の製作を助成すること多く、

鐵路の延長は廉價に旅客貨物を運送するならん。如斯して國家富み、生産増加し、物價低減して、職工富有となり、資本増加して新事業起り、賃金は益高騰するに至らん。國家の利益豈之より大なるものあらんや。加之、此場合にありては猶他の利益隨伴するを見る。予は奢侈の費用を有益なる製造物に移轉せる結果を觀察するに當り都會と田舎とを同一視せり。然れども實際に於ては田舎の賃金低廉にして生活の程度亦卑下なるを以て同額の資本と多數の労働者を使用するを得べし。又有益なる貨物、並に必需品の生産は、一時に轉變する贅澤物

の生産より遙かに健全なり。彼の信用落ち歳入減したる所謂經濟上の危機に際し、先づ第一に影響せらるゝものは贅澤品の生産にして、最初に職を離るゝものは是等贅物の生産に従事する職工なり。且つそれ必需品の生産は流行の變化少なきを以て之によりて生ずる今日の如き悲惨を消滅し得べし。予はフランダ―に於てまだ稚き小女幼童のバレンセンネス紐と稱するものを製作するを實視せり。而して此紐はブラッセル紐、アレコン、ベネテア^ンと間斷なく轉變するが爲に是等バレンセンネス紐の製作に従事する職工の賃金は今や低減して僅かに飢餓を救

ふに足るの程度に至れり。是等手に紡錘を以てる精巧老練の職工等が一人の名高き仕立屋の新意匠により一朝其食を失ふに至るは人生の慘事豈之より甚しきものあらんや。奢侈は獨り富の蓄積を妨害するのみならず又職業を減少す。而して仮りに勞働を増加するとするも有用なる財貨の生産にわらずして不規則なる種類の生産に過ぎず。或は曰はん金錢は流動せざるべからずと。余は之を以て全く無意味の語と評するの外なし。流動はそれ自身に於て何等の結果を有せず。金錢の流動は恐らく賭博場より激迅なるものあるべし。千萬金忽ち得られて忽ち失はる。

然れども國家は之に依りて以前より富みしか。金錢は之を瓶にして地下に埋没するにあらざるよりは少くとも常に流動順環して止まず、我輩の論するは金錢の流動すると、せざるとの問題にあらずして、金錢は其流動によりて、社會を改良して人間正當の欲望を満足せしめたるか。若しくは反之、單に虚誇、貪欲、輕佻の惡念を養成する爲に不用の冗物を増長せしめたるかの問題なり。

國の大典祝日に際して八千ポンドに價する煙火の打揚らるゝこと稀なりとせず。賢者之を見て鑿し、愚者悦ぶ。愚者俗人謂て曰く八千ポンドは國內に殘留するにあらず

や。其愚も亦甚しと云ふべし。煙火の費用は疑もなく國內に存するも之によりて代表せられたる富の高は消散せり。此場合には二種の資本あり。即ち一は金錢にして他は火藥なり。火藥な石灰其他の礦物の採掘に用ゐらるべく、墜道、運河の開鑿に須ゐらるべし。假令金錢は國內に存するも煙火一發、是等の効用は凡て煙となりて消散せしにあらずや。消費は常に破壊を意味す。故に我輩の主張する所は、其破壊の賠償として正當なる缺乏の満足、若くは新生産の必用なる方法を受取るにあり。凡ての消費は交換の形體を以て之を表示し得べし。人若

し一定の代價を仕拂ひしからば其引替として何物を取得したるかを反省せよ。其取得したるものは身體の健康、精神の榮養ならんか。是れ利益ある商賣をなせるなり。若し高慢虚飾を挑發するものならんか。是れ損耗多き商賣をなせるなり。

以上論する所によりて之を見れば國家が官吏の服制を美にし之によりて官吏を勉勵せしめんする如きは策の最も拙なるものにして、徒らに奢侈の範圍を示すに止まり、資本の沈退、産業の長縮、賃金の下落、亦茲に淵源せん。社會の公職にあり公衆に臨むものは宜しく質素儉約の生

活を得べく、青蚪紫燕、肩端風を切るの愚を學ぶべからざる也。亞米利加、瑞西の共和國に於て官吏給料の差異を僅少にし。下級官吏は上級官吏に比して割合に多割の報給を享受するの制度を採用したるは大に我輩の贊同する所也。

經濟學者が容赦なく歐洲大陸の大都市に於て演劇の爲に醜金するの非を鳴らせるは頗る正當なり。我輩は精神を開發し、道徳を進歩し、美に對する趣味を醇化する如きものに對しては如何なる多額の醜金も之を吝まざるべし。されど二三の演劇を除くの外今日にては趣味を高尙にし

精神を開發するもの一としてあるを、彼ルーソーがド、アレンベルトニ與へたる書簡に論せし如く「公金を惡慣習の學校と腐敗の産出地に浪費するもの滔々皆然り、貧民が富豪の娛樂の爲に金錢を消費し、招待券を有するものを半額にて觀劇せしむる爲に公衆が醜金するとは事理の轉倒も亦甚しからずや。演劇は金錢を流動せしめ商業を繁榮にするとは一般人の唱道するところなるも是等有害なる迷信は前既に辨駁したれば更めて茲に言はず。十八世紀に於ては經濟學上の原則より是等の迷信を打破するものなかりしより、當時の學者は概ね自家撞着の議

論をなせり。ヴォルテア、は常に奢侈を非難するに拘らず、モンテン其他の著書に於て奢侈の必要を論述せり。是れ蓋し當時奢侈を激稱する「蜂の話」なる著書出て之に感化せられたること多きが爲也。モンテスキウに至りては其矛盾も極端にして、一方に奢侈は破徳零落の原因たるを説明しながら、當時の信仰に感染せるの結果、奢侈は富の本源たることを主張す。彼れ乃ち曰く。「流行は必要の事柄にして、人心の輕佻は商業の繁榮に欠くべからざるものなり」と。ヴォルテア亦同一の筆法を須むの如く曰へり。

“Sachez surtout que le luxe enrichit

Un grand Etat, s'il en perd un petit

Le pauvre vit de vanités des grands.

我友よ小國を頽廢せしむる奢侈は大國に繁榮、富貴、
光輝を與ふものにして、富豪の虚誇は貧民に生活を授
くるものありと知れ。

ラ、ンオンテンも此一般的迷信を反響せしめたり。

Je ne sais d'homme nécessaire

Que celui dont le luxe épand beaucoup de biens,

Nous en usons, Dieu sait. Notre plaisir occupe

L'artisan, le vendeur.....”

吾れは奢侈の爲に金銀財寶をそこ此處に撒き散らす人
程必要なるものを知らず。吾々は如何に多く消費する
かは天のみ之を知り、吾々は唯技術師、商人に職業を
授くるを樂とするのみ。

ルーソーの如きも偶奢侈は貧民に生活を與ふる爲に必要
なりとの思想を抱懷せり。然れど彼れが奢侈微りせば貧
なからんと看破するに至りては宜しく不磨の言として肝
に銘すべきなり。

故に我輩の急務は、社會民衆の腦理より奢侈は労働者に

職を授くるが爲に經濟上有益なりとの根本的誤解を除去するにあり、虚飾、遊惰、浪費は他の有益なる事業に利用せらるべき資本を空しく蕩盡するものなりとの觀念を充分に理會せしむるにあり。社會民衆をして急激に此道徳的教訓に歸依せしむるは頗る難事にして到底實行せらるべきにあらずと雖、少くとも未だ熟せざるに穀物を刈取なからしめよ、社會同胞に重大の職務を與ふる財産を浪費するなからしめよ。

シスモンデー其經濟新論に於て論じて曰く。「富豪が一朝にして貧民の如き自個の労働によりて生活し、其収入を

悉く資本となすに至れば、労働者は忽ち絶望して餓死するに至らん」と。シスモンデーは富者が其収入を資本に轉するに當りては之を器械、農具其他の必要に費し、之によりて、奢侈品を購買する場合と同じく多くの労働者に職業を與ふるものなることを忘却せり。唯それ奢侈品の製作に従事せるものは俄かに他の職業に轉する能はざるべきを以て、急激なる變化は是等職工をして一時路途に彷徨せしむべし。變化は急激ならずして漸次推移するを要す。然れども上流社會が一朝にして悉く労働者となる如きは百年河清を待つと均しく決してあり得べからざる

事實なるを以て之に關して毫も悻憂を抱くの必要あらざる也。

第十章 奢侈と正義

予は第三の方面 即ち奢侈と法律並に衡平法との關係を論せんとす。奢侈は果して正義の觀念と一致するものなりや、否や。基督教の教旨は徹頭徹尾此問題を否定せり、試に吾人をして教典のうちより二三の句を引用せしめよ。「富める人が渦中に投せられしに貧なるラザルスはアブラハムの懷に抱かれにき」。「富める人の天國に到るの難きは針の孔より家畜を通過せしむるよりも甚だし」。「彼等は此

浮世の榮華を幸福とする故に我富めるを彼等に悲ましめよ。富の不合理なる使用によりて成立する奢侈は如斯して基督教によりて絶對的に排斥せられたり。

基督教は權利の平等を是認せり。豊富なる財産を有するものは自身に之を正當なる目的の爲に使用する能はず。生活の第一必需品を缺亡せる貧民と其財産を分配するは彼等の義務なり。サルビンが云へる如く富者は貧者の管理者なり。ポードリラー氏は、施與に就きてポードローが爲せる説教の一節を引用して最も明白に此教義を説明して曰く。「自然法に従へば凡ての物は萬人の共有財産た

らざるべからず。凡ての人間が均しく人間たる以上は何人も他人に比して巨多の財産、巨多の権利を享有すべき理由あることあり。各人は其現時の必用に應じて地上に散布せる菓實を聚取するは、是れ全く神意に合するものなり。富者は貧民に施與をなせしを以て恩恵を與へしと自負する勿れ。施與は單に貧民が富者に對して正當に請求し得べかりし負債を償却したるに過ぎず。若し富者にして之をあざりせば不正なるべかりし負債を返濟せるに過ぎず」と。我輩の見る所にては基督教は奢侈の淵源即ち此財産の不平等を救濟する爲に唯一の策あるのみ。す

ち彼等は施與を以て唯一の救濟策となし。其他に何等の方法を講ずることなし。然れども吾人は經濟學上の宗則に依り施與は單に優柔怠慢並に品性の墮落を引起すに止り、之を勤勞するものに奪ひ、之を勤勞せざるものに與ふるに過ぎざるを見るに及んでは、他に方略を廻らす必要あり。佛國經濟學者 ジョン・バプチスト・セーは財産の極端なる不平等は奢侈の本源たるべき理由を最も明瞭に説明して、「財産の極端なる不平均は凡ての消費に對して有害なり。財産の不平均は空想的の缺亡を發達せしむると共に正當なる缺亡を減縮せしむるの弊害あり。極端な

る貧困と、過超なる豊富とは隨所、相並んで存在し、人間の一部分に起る勞働は他の部分に生ずる無用の缺乏を填補し、燦然たる金殿玉樓は煙火蕭條の矮屋茅舍と相對立し、困頓苦痛の悲劇は豪華奢侈の壯觀と相映射しつゝあり。換言すれば最も無用の冗物は、最も逼迫せる困弊の真中に跋扈しつゝあり。と云へは能く時弊に適中せる至言と稱すべし。

モンテスキウはボードローの言ひし如く「私有財産は國民大部分の必用なる形態を毀損してのみ増加せらるべきを以て此損害は他の方法によりて賠償せられざるべからず、

と論斷せり。然らば如何にして此損害を賠償すべき乎。

要するに富者の失費に據るの外なく。猶足らざれば政府をして富者に課税せしめてなりとも其損害を、補充せざるべからず。佛國革命史の編纂者、並に佛國民法の起草者等は不完全ながらも市民の出來得る丈の大部分に種々の形態に於て、成るべく財産を平分せんと企圖せり。即ち各人をして土地、貨物、其他公債に於て多少の財産を所有せしめんとせり。換言すれば彼等は財産の共有主義を實行せんとせしなり。其結果は各個人をして自己勞働の結果を充分に共有せしむるを得べく、極端なる不平等の

必然の結果として、經濟學並に基督教の教旨に依り均しく非難攻撃せられたる、彼の最も厭惡すべき奢侈をして全く敗滅に歸せしむるを得べし。若し器械の進歩が生産を増加し、生産物を精撰するに至らば、生産の必需品は一般人民に充分の程度に於て分配せらるゝならん。近世の法典未だ成らず、封建制度未だ起らず、王權未だ盛ならず、土地均分の法未だ減せられざりし古代の國家は實に如斯ものにてありき。

十八世紀の他の學者と均しく此奢侈問題に關し多くの愚論を繰返せしホルテアの如きも、此點に就きて丈は其有

名なる哲學字彙に於て明了なる斷案を下せり。「若し奢侈なる語に據て實際の必要に超過する凡てのものを意味するとせば、奢侈は人間進歩の必然の結果なり。我が意見に反對するものは、彼のルーソーの所謂、人間幸福の理想的状態は、野蠻のうちにあらずして寧ろ猩々にありとの説を信憑するを要す。凡て人間の賞揚したる貨物を罪惡として觀察するは誤謬の正しきものなり。故に奢侈ある言葉は社會の少數者のみ享有し得るそれ等の贅物として解釋せらるべし。此意義に於て奢侈に財産——不平等なる財産の必然の結果なり。奢侈は惡法の生産兒にして善良な

る法律によりて壊滅せらるべきものたり。道德家は一人に教訓するの迂濶をなさずして立法者に直接勸告するを正當の順路となす。何とあれば國內の富者が善に移るが爲に一朝悉く黄金を以て歡樂を買ひ、虚飾を求むるの念慮を斷絶するに至るは到底豫期すべからざる事實にして、寧ろ賢明美德の立法者を説破し、善良なる法律を制定せしむるに如かざればなり。

第十一章 國家の奢侈

予が信ずる所に依れば、種々の奢侈中、正當と認むべきものは公共の奢侈、國家の奢侈のみにして、此種類の奢

侈のみは大に獎勵鼓舞せらるべきものなりとす。

ポードリラー氏は此問題に干して頗る卓越せる注意をなせり。今其要領を擧ぐれば左の如し。「國家は常に公園、泉水、演劇の如き快樂を公衆に共有せしむるを務むると共に、又繪畫、彫刻を所持し能はざる群衆に向て美の蓄積を展覽せしむるを勉むべし。國家は美術の爲に博物館を起し、科學、文學の爲に圖書館を設け、生産業の爲に博覽會陳列場を開き、高尚なる快樂を社會民衆に供給するを怠るべからず。此等の綜合的奢侈は、其方法だに誤らずんば凡て社會人民に有益にして人智の程度を提起し、

生産の技能を進昇せしむるものなり。且つ此種類の奢侈は他の顯著なる利益を有す。即ち個人の場合に於て虚飾、浮誇の原因たるべき利己、孤立の念を變じて、萬人の仰瞻を求むる公共心となすの利益あり。又富者の押領に屬して偶少數者のみが翫賞し得る多くの快樂を一般社會に共有せしむる利益あり。

ポードリラー氏は予が屢々引用せる著書「奢侈の歴史」の末章に於て、國家奢侈に關する改革意見を吐露せしが、此點に於ける彼が意見甚だ正當にして、間然する所あり。社會が共和的になるに従ひ眞正の技術を獎勵するに適當なる

は疑を容れず。往昔、ペリクルスの時代、亞典の市は其歳入の三分の二餘を紀念碑の建立に支出し、府人ピンダの告ぐる所に依るに希臘七紀の祭典に當り、ローダナスがミテルバに祭壇を建設せんとせしに、其島に黄金の雨降下せりと云へり。文學美術の獎勵せられたる國民に降下する黄金の雨は、純潔清淨ある歡樂の聚雨なり。

フエリキッス、ラベーンが其著「技術之階梯」に於て「教育は其始め實物、模型の方法により教授せられざるべからざるも、此等の模型實物は最も高尚なる智識を促進する爲の手段として役立つものにあらず」と論せしは實に正當の見

解なりとす。社會の人々にして清秀なる調和と、公正なる配合とにより吾人の五管を貫通して心裡に發生する、神聖、健全の快樂に満足するに至らば、厭忌すべき奢侈、野卑陋劣なる風尙は今日の如き勢力を以て社會に跳梁せざるべし。若し又吾人にしてレオナード、ドヴィンシが所謂、地球上の美物 (La bellezza del mondo) あるものに着眼し。凡て此廣大なる宇宙の各所に散布する美觀を翫賞し、パスカルパスカルの所謂、悲哀の情を慰撫し、高尚なる運命を豫見するものを景慕するに至らば、其重荷に堪えずして氣息奄々たる人民を困頓の渦中に救濟し得べきにあらずや。

是れ實に種々の部面に連關する大問題にして、到底小冊子の能く盡くす所にあらざるを以て、余は茲に之を詳論せざるべし。此問題に關して余はポードリラー氏と全く其意見を同うす。予はポードリラー氏の此等に關する議論が大に政治家、行政官等を裨益すべきを信じて疑はず。

第十二章 奢侈と政体

予は茲に奢侈と政體との關係に就き數言を費さんとす。問題の甚だ浩幹に亘るを以て固より其概略を説明するに過ぎず。ポードリラー氏は又此問題に關し一篇の議論を草せしが、論理明白、議論透徹にして異論を挾むべき點

を見ず。然れども予はポードリラー氏に比して更に一層の嚴肅なる主義を懷抱しつゝあるものなり。ポードリラー氏は或程度の奢侈を以て君主國に缺くべからざるものとせり。彼れ乃ち曰く。「君主國は外觀の盛粧なくして成立すべからず、一定の虚飾は君主專制には必用なるものなり」と。

ポードリラー氏。更にモンテスキウが富の平分、存在する共和國には奢侈成立する能はず。是れ共和國の他の政體に卓絶する所以にして、奢侈の度少なれば少なる程、共和國は完備すべし。財産の均分と隨伴せる凡ての共和

國にありては商業の發達、工業進歩並に之と結合する美德は能く其人民をして、自個の財産によりて生活せしむべきを以て、所謂奢侈なるもの起ることなしと云へる。説を、駁撃して若し彼にして今日にあらしめは如斯愚論をなさざりしならんと翻弄せり。然れども余は今日社會一般の狀態より觀察してモンテスキウの意見が正當にして。毫も改竄する必要なきものと信ず。

ポードリラー氏曰く予は人間を有りの儘に觀察して立言するものにして、人間は如斯あれがしとして議論するものにあらずと。凡そ事物を論するに當りては議論の成立

點として實際に就き立言せざるべからざるは勿論なりと雖。道德上の學問を講究するに當りては、勢ひ人間は如何になり得べきか。如何にならざるべからざるかを探究せざるべからず。吾人は一の理想を描きて之を追求せざるべからず。是れ經濟學者の徃々輕々に看過する所にして大なる欠點たるを免れず。

古代にありては、宗教上の儀式の影響として、華奢盛粧は迷信的、畏怖、尊崇を挑發するに必要なりしを以て帝王は凡て威容嚴然として臣民に君臨せり。當時、君主は其身邊を圍繞するに莊嚴華麗を極悉して、凡ての權力を

掌握する神なりと信仰せしめんとせしを以て、奢侈贅澤は確かに權力の一基礎たりしなり。今日に於ては是等の偉觀は最早黔首を欺懣して權力を確保する方便たる能はざるのみならず、却て臣民の怨恨を買ひ、憤怒を發せしむるの原因たり。數年前ベルリン、マドリット、ネーブル等に於ける君主弒逆者の返答亦以て之を證明するに餘あり。弒逆者の一人。「何故に汝はフンベルト王を弒せんとせし乎」の審問に對へて曰く「フンベルト王は善良にして國政に勤勉なれば、予は王自身に對して何等の憤怨あることなし。然れども彼は豪華、民を虐くる貴族の首長なれば頸

血を衰衣に灑き彼等豪奢の徒を警戒せしめんとせりと
 モンテスキウは。帝王が人民自由の思想を防止する爲に、
 奢侈遊惰、人民を腐敗せしむるの必要ありと思惟しぬ。
 現今の君主は既に公共の目的に鞠躬奉事すると、質素純
 樸の生活をなすとは、臣民に忠實なる適當の標章たると
 を自覺せり。フンベルト王も今は其父ヴクトルエマニ
 ル(兵士にして獵師たる)の如く榮華の憎むべきを悔悟せり。
 又澳大利の帝王が輪奐偉麗たる宮殿の新築せられしに拘
 らず、依然として父祖の古砦に住する所以のものは、臣
 民の憤怒を招かんことを恐れてなり。伯耳義の王、レオ

ポルトの如きは其王室費を割きて文學、技術、農業を奨勵
 せるのみならず、更に進むで中央亞弗利加の文明を進歩
 せしめんとせり。英國の女皇ヅクトリアが自ら質素節約、
 經濟の模範を示せりとて愚人の失笑を招きしは何故ぞや。
 共和國の大統領は專制國の君主より概ね質素の生活をな
 す所以のものは、人民之をして然らしむるに依る。奢侈
 は他人の必需品を犠牲として始めて成立し得べきを以て、
 共和國に於ては外觀を粧飾するを以て公共心の缺亡とし
 て之を排斥する風あり。
 人間の幸福が大なる富のうちに成立するものなりとの誤

見が世上に流布する今日、最も高尚なる技能は最も大なる質樸と相一致し、真正の快樂は貪慾矜誇と全く相異なるものなることを人民に確信せしむるは實に共和國大統領の責任にあらずや。モンテスキウが「共和政治は極端なる財産の不平等を撲滅するが故に従て奢侈を除去するものなり」と主張せるは、實に千古の卓見なり。彼れ乃ち曰く。「奢侈は他人の勞働にて生産せられたる貨物を壟斷するに依りてのみ成立し得べきが故に、富が平等に配分せらるる國家に於ては奢侈の發生すべき理由なし」と
マツクセル、セニオル、亦曰く。奢侈は賭博により戰爭に

より、若しくは詐欺により職業なくして富を得る人々の中に發生するものなることを歴史は吾人に證明す」と。眞に然り矣。

讀者は古代の共和國家は凡て社會生存の逼迫の下に轉覆せることを記憶すると共に、又此同一危険は常に吾人の眼前に横はり、時々、刻々恐怖すべき悲劇を繰返しつつ、あるを忘却すべからず。

アリストートルは其豊富なる智識と、明晰なる論理を以て、最も精確に此問題を説明せり。彼れ則ち其巨作「政治學」に於て共和政體の危険と其救濟策を説明して曰く。

「不平等は凡て革命の原因なり。人間は或點に於て平等なるを以て、凡この點に於て平等ならんことを希望せり。自由に於て平等を得るに及びて、社會人民は絶對の公平を希望しつゝあり。而して其絶對の平等を得る能はざるや、彼等は其權利を侵害せられたりとして、博浪沙の一撃其目的を達せんと欲するなり」と。予の信する所に據れば社會の暴動革命を防止する唯一の方法は、極端なる不平等を打破するにあり。アリストートルの如く最も貧困なるものにも多少の財産を所有せしむるにあり。佛國革命の影響として、田舎の小民にも幾分の財産を分與して其

不平を慰撫せる如きは即ち我が主張する論旨の適例ならむ乎。

財産の共有は共和主義の唯一、健全なる基礎なり。若し各家族にして多少の土地、多少の貯蓄、公債若しくは收入の強固なる多少の財源を有せしめば、如何にして能く社會的革命の爆發する理あらんや。労働者は幼少の時代よりして學校に於て技術を練習し、勤儉の美風を養成せられ、政府は出來得る丈、財産の所得を確實便利ならしめ、少數者のみの利益を計るが爲に制定せられたる法律は廢止せられ、社會公衆のためには出來得る丈の安寧幸福

を確保する制度が採用せらるゝに至らば、社會の不平何によりて生せん、改革運動亦何によりて起らんか。

又社會の富者、餘裕あるの徒に至りては、彼等の義務として是等の自由的運動に従事すべく。職業の勤勉、愛國の精神、生活の質樸、高尚なる智育徳育の模範を自ら卒先して公衆に表示すべきものなり。

富は其義務を有すてふ基督教の教旨は不磨の眞理なり。安居して國家生産物の大部分を處分し得る社會の富者は、唯彼等の物慾を増長し、虚誇の念を育成する爲に、其過超財産を使用するを止め、亞米利加の大統領、並に歐州

二三の君主が爲せる如く、其財産を公共事業に使用する義務あり。古代の共和國は奴隸制度に基き、正當なる社會組織を維持し能はざりしが爲に腐敗と内亂とにより滅亡せり。若し近世の共和國にして基督教の理想を實在にし、古代の純樸ある風習を採用するに至らば、是等の危険を免るゝを得べき乎。

彼のポルテアが「奢侈の風を消滅せしむるものは傳道師の説教にあらず、經濟學者の空論にあらずして、制度、法律の漸次の進歩にあり」と論せしは大に我意を得たり

奢侈亡國論終



附 錄

第一章

經濟學と社會學の分派との 干係を論ず

經濟學は、同種類の他の科學、即ち哲學、宗教、道德、法律政治を論ずる所の他の科學と密接の關係を有す。經濟學の目的は如何なる法律、如何なる制度が労働の生産力並に富の正當なる分配に最も恰好なるかを決定するにあり。經濟學の定義中、予の最も適合ありと考ふるものは彼の亞米利加百科全書中にあるものなり。即ち經濟學の目的

は政體法律、立法財政の組織、社會の制度教育宗教風俗
土地、地位、氣候、技術凡て是等の事情が公共の富（即
ち人間生活に適當にして必用ある凡ての物の生産分配、
消費）に關して、國民の品性、狀態に如何ある影響を與
ふるものあるかを研究するにあり。

ルソーが其民約論を初めて世に公にせし時に當り、余
は人間を有の儘に觀察し、法律をあらざるべからざる如
く假定し、社會制度中、行政の正當にして健全ある系統
を發見せんと欲す。予は常に法律と幸福とを結合し、正
義と利益とを相反する勿らしめんとす」と明言せるは殆

んと此定義と相一致するものと云ふべし矣。權利と幸福
との結合、並に正義と利益との結合は最も重大にして必
用なる點なり。

是れ世人の往々にして忘却する所なるも、佛國のヒキジ
オクラット、英國のアダム、スミス等をして此科學を創設
するに到らしめたる光明にして又動機あり。アダムスミ
ス曰く、「經濟學は政治家、立法者に對する科學の分派と
して二の適當ある目的を有す。即ち生計の澤山なる方法
を人民に附與すること、並に公職に適當したる歳入を政
府に供給すること是なり。換言すれば人民と君主とを富

有にすること是なり」と。

人或は曰はん「一般の原則を論ずるは科學なるべきも、此等の方則を適合する方法を研究するは技術なりと。然れども若し吾人にして目的を追求する智識の凡ての種類に技術ある名目を適用するとせば凡ての道德上の科學は皆技術あらざるべからず。然るに所謂道德學に至りては、人間の性質を有りの儘に記述するに止らずして、人間は何を爲さざるべからざるか、人間は如何ある義務を果さざるべからざるか。如何なる徳行をなさざるべからざるかを攻究するにあらずや。法律の目的は如何なる規則が

人をして正義をなさしむるに適當あるやを決定するにありて、經濟學の目的は如何なる種類の社會制度如何ある種類の政府政策が一國人民をして文明並に繁榮の最も高等ある程度に達せしむるに必用なるかを研究するにあり。道德學は人類を善良、幸福、完全に導くを以て其主旨とするを以て、法律經濟學と其方向を一途にす。然るに之を以て尙は技術なりと云ふを得べき乎、予は之を信せず。技術は既に是等の科學により發見せられたる行爲の規則を適用するに當り其方法を研究するもの也。經濟學は一の理想を有す。即ち正義と一致したる人間の幸福を眼中

に置くことを要す。經濟學者は一般的人間の性情を考へ各人民の特質を察し、歴史、統計記録によりて得たる事實に徴し、如何なる法律と如何なる制度が此正義と一致したる幸福を人民に享有せしむるを得るやを研究せざるべからず。經濟學者は原因結果の關係より推論して實際的規則を案出せざるべからず。

如斯にして大なる地平線は吾人の眼前に横はりつゝあり。吾人は最早屢々稔聞せる自然法を以て満足すべきにあらす。又需用供給の原則を聞知せるを以て充分なりとせず。更に進んで如何なる法律如何なる制度が社會をして最高

程度に到着せしむるに必要なかを講究せざるべからず。經濟學と政治學との密接なる關係は能く是等の問題を解釋するに切りて力あらん。如何なる政體が富の増加に最も適當なりや。此點は能く小冊子の論極する所にあらざるも、モンテスキューは之に關して、確かに一點の光明を與へたり。彼れ即ち「法律の精神」に於て論じて曰く「國家の文明繁榮は土地の豊饒によるにあらずして、人民の自由による。……専制主義は恰も菓實を得んとして樹木を切り倒す野蠻人の如きものなり」と。古代君主權力の濫用を論じて燃ゆる如き痛罵を専制政治に與へし「支那の

奢侈」の著者も亦曰く「共和國に於て如何に富の平等は行はれつゝある！」と。著者は其書の十三篇に於て租税歳入と自由の關係を論じ、十八篇に於て風土と法律の關係を述べ、廿篇に於て法律と商業の關係を説き。最後に法律と人口との關係を明にし、議論皆能く其肯綮を得たり。ルソー亦希臘羅馬並に以太利共和國の例を引き、此等の國に於て自由の爲に崛起したる一揆徒黨は専制の洗退よりは國家を零落せしむるものにあらざることとを證明し、深遠なる意見を吐露せり。彼即ち曰く「暴徒内亂は有職の徒には恐怖すべきものなれども、人民の實際の不幸を

引起すものは之にあらざして却て他にあり」と。眞に然り。國家の繁榮消沈は國民永久の狀態により自然に發生すべきものにして、決して一時の暴徒により左右せらるべきものにあらず。凡ての人間が桎梏の下に束縛せらるゝ時に始めて凡ての人民が零落し頽廢す。故に彼等の主權者が平和を攪亂するなり。彼等主權者は國家を腐敗淪滅の極に致し尙且つ平和と誇稱しつゝあるなり。見よ希臘は古代に於て百戰の後、鮮血杵を漂はし、死屍野を覆ひしに係らず、尙能く繁榮隆盛を致せしにあらずや。

マキアベリイ謂へるあり。「吾人の共和國が優勢となるは

逆殺、暴徒、内亂の渦中にあるが如し。市民の風習、態度、並に彼等の獨立は戰亂の際に腐敗せずして却て改良せらるゝを見る。一小争闘さへ能く人心を奮起せしむるに足るを以て自由戦争が國民の精神を刺撃して其繁榮を導く亦疑を容れず」と。實に歴史は此等の適例を吾人に繰返せり。

ルソー又其椽大の筆を以て此等の注意を描出せり。曰く「吾人の法律は多くの生産を爲すが爲に勞力をして常に必要ならしむる如く制定せられざるべからず。我が見聞せる各地に於て資本の勢力は全國を零落の淵に沈淪せ

しめつあり」と。予嘗て露西亞の内地を旅行して此感に打たれたること尠からざりき。

人若し政府の經濟上に及ぼす影響を知らんと欲せば、フヰリップ二世以來スペイン衰亡の歴史を一讀せよ。小亞細亞の荒亡せる原野、蕭條たる村落を旅行せよ。此等の國が古代に於て無比の繁榮を致せしを想へば感慨無量涙巾を濕すものあらむ。

トクワエビーレー共和政府の經濟上に及ぶ影響を論悉して餘蘊なし。曰く「人間の精神中に世界の善事を愛するの念を養成する凡ての原因は商業、産業を發達せしむるも

のにして。平等は確かに其一なり。是れ直接に職業の趣味を個人に附與するのみならず、又間接に人をして社會の幸福に對する希望を普及せしむるものなるを以て産業商業を發達せしむるものなり。人誰れかテリアンよりフロンテスに至る專制時代に一個の産業商業的人民を指命し得べきものぞ。故に自由と産業の發達との間には密接の關係あり」と。

彼れ又純正經濟學の點より觀察し、專制政治の中に包含せられたる危険を指摘して曰く、「單に物欲を藉りて其情を充さんとする人は常に自由の爲に引起されたる暴徒が

彼等の財産を攪亂せんことにのみ着目し、依之彼等は如何なる自由を確保し得るやを觀察せず。而して彼等私人生活のつまらなき快樂に満足するものは、一たび自由戰爭起るや、秩序紊亂の徵候として憂苦し、無政府の端緒として恐怖し、自由戰爭は如何なる結果を社會に持ち來すやを豫見せず。其政府よりして秩序の維持の外、何等の自由をも請求し能はざる國民は既に奴隸にして、實際に彼等は鐵鎖の下に束縛せられつゝあるを自覺せざるもの也」と。一千八百五十二年に起れる佛國革命は皆彼の豫言を證明せり。

彼れ又大なる觀察力を以て、近世産業の特質並に雇主と労働者との關係を精論し、ドボン、ホワイトは穎利なる理想を以て經濟學と政治學との關係を説明せり。是等は皆以て參照するに足る。

予は次に宗教が労働の生産力、並に國民の繁榮に如何なる關係を及すかを述べんとす。労働をして生産的にならしむるものは、生産業に科學を應用すること、並に法律に於て正義を維持するにあり。故に天然の研究を非難し、大なる不平等、大なる不合理を尊崇する各宗教は、經濟的發達に有害なるものならざるべからず。支那古代の宗

教並に天體の信仰は農業と山林業とを以て敬虔の行爲として獎勵せるを以て、支那、波斯は其後長く世界の富國として繁榮し、今日に至るも支那人が到る所に彼等の資産を作りつゝ、あるは其宗教に負ふ所多し。

モセスの教義には經濟的幸福の進歩を助成するもの多かりき。モセスはパレスタインの荒廢せる土地に豊富の食物を供給し、著しく其國を繁榮にせり。當時彼は現代のパレスティンより十倍の富と人口とを以て其國に貢獻せり。今日モセスの子孫が世界の到る所に商業、財政の主權を掌握するに至れるは其祖先の遺訓、流風之を然らし

めたるものにあらずや。東方歐州の如き、壓制の結果として猶太人の放逐せられたる國に於ても、一たび其禁の解かるゝや、彼等は陸續として其地に侵入し、國民を後に瞠着たらしめたり。露西亞の如きに於ては罪なくして彼等の虐殺せられたるもの其幾萬なるを知らず。然れども彼等は斷々乎として商界の戦闘に成功しつゝあり。マホメツト教は埃太を除くの外當時或ゆる世界の強國を粉碎蹂躪せり。マホメツトの獨斷教は猶太教と異なる所なきも、彼等は專制主義を創立し、科學を輕蔑し、並に過激なる命數教を教示せしを以て、凡てのものを破壊す

るに充分なりき。亞歷山亞アレキサンダリアの書籍館を燒燼するに由りて始まりし彼等の教義は智識の進歩を促進する所以のものにあらず。従て富の蓄積を増加する所以のものにはあらず。

基督教は凡て人間の自由開放を準備し、到る所に平等主義の觀念を輸入せしを以て近代文明の偉大なる擴張を持ち來せり。故に吾人は基督教國の優勢ある地位と他の國家とを比較して、最も繁榮にして最も幸福なる人民が基督教の教義を遵奉する人民なることを知らば、容易に我輩の主張の誤らざることを知るに足らん。尙且つ最も嚴

格に此等基督教の教義を採用せる宗派、即ち英米のクエーカー宗、獨乙のメソナイト派の如きは一人の零丁孤苦なくして其宗徒は皆安穩幸福に生活しつゝあり。彼等は恰も基督が教訓せし如く、熱心に間斷なく勞働しつゝあり。彼等の精神は高尚にして衣服家屋の奢侈を禁じ、慈善能く彼等の同胞を憐むと共に勤儉能く貯蓄し、産業を發達し、資本を増加し、自由の基礎を設定しつゝあり。今日亞米利加合衆國が驚くべき進歩をなせるは此精神に外ならざるなり。

第二章 經濟學と道德との干係

道德の問題は經濟學の根本問題也。經濟學の主要事項は何なりやと云ふに富の蓄積に外ならず。而して所謂富なるものは何ぞやと云へば、彼のロツセルの定義せし如く「人間眞正の欲望を満たす所の凡ての物、即ち人間の性情に有益にして理性によりて有用なりと認定せられたる總ての物ならざるべからず。換言すれば、正當の必用を充たす凡ての物なり。

然らば正當の必用とは果して何ぞや。攝生の原則により

實際人間の身體に必用なるや否やを検し、道德の範圍に於て人間の精神に必用なる満足と與ふるものなるや否やを知り、之を決定するの外なし。道德法は一方に於て彼の方柱の頂上に端座して成佛を求むるシモン、ステライト若しくは塵芥汚泥の裡に生息するサン、ラブレの如き禁欲主義を排斥すると共に、他方には彼の薔薇花の馥郁たる香氣に睡眠を醒まし、數千人の服役も其無限の欲望を満足し能はざるシバライトの如き豪奢を除外せり。禁欲の極身體をして精神の器械たる能はざる迄之を毀損するは甚た不正なるも、飽食暖衣、身體を脆弱ならしめ、精

神を癡痺せしむるは決して許容すべきことにあらず。予が前述せる如く希臘人は此點に於て吾人の標本となすに足る。彼等は勞苦に堪へ、氣候に勝ち、疾病瘴毒も侵す能はざる如く、専心銳意體格を強健にし活潑にすることゝを怠らざりき。彼等は又哲學政治の議論により、技術の研究により精神を開發するを務めたり。

古今の道德教は凡て欲望の中庸を訓戒せしが、經濟學者は反之人間無限の欲望を以て經濟上必用の要件となせり。蓋し彼等は人間の欲望にして無限ならば如何に器械が進歩せるにもせよ、産業の中絶するなしと思惟せるに依る。

此等の相反せる二個の教旨中、道德の教訓が正當なることと明なり。假令器械の進歩が人間正當の必需品を供給する時間を短縮せるにもせよ、吾人は此等の器械によりて輸し得たる餘暇を單に無用の冗物を製作する爲のみ消費する理由なし。之を無用に消費するもの恐らくは彼のバスタアの所謂「唯労働の爲に労働する徒」のみならん。少しく思慮あるものは一日八時間の労働により自己正當の必用を満足し得るとせば其餘の時間を以て徒らに袖口を縫箔し若しくは玩弄物を製作するの愚を爲さゝること明なり。必ずや彼等は亞典の民の如く疎衣僉服、ソクラ

テスの講演に出席し、ソホクレスの歌曲を稱賛し、デモセスの演説を傾聴せしなるべし。人間種屬は如斯方法に於て自身を使用せざるべからず。然るに我都市の店舖を一見せよ、無用の贅澤品は相並んで其虚榮を發揮しつゝ、あるにあらずや。若し此等の爲に消費せられたる労働を他の必需品の製作に利用せしめたらば、是に因りて吾人は如何に大なる利益を得べかりしよ。器械の最上の利用は無限の奢侈を助長するにあらずして、各人に生活の必需品を供給し、人間精神の開發の爲に、天然の美を翫賞せしむる爲に各人に餘裕を附與するにあり。吾人の物的

欲望は吾人を奴隸とする鐵條なり。物的欲望を満足する爲には實に貴重にして又吾人生活の要素たる時間を犠牲にせざるを得ず。物質的欲望の奴隸となりて顧みざるの徒は遊惰生活の夢想的快樂に人生の自由を讓與するものに外ならず。經濟學者等が彼の「眞正の經濟學は眞正の道德と相一致するものなり」との道德家の言を輕視するは甚だ誤れり。

富とは交換價格を有する凡ての物を云ふか。是れ道德家の研究せざるべからざる問題なり。彼の王政復古の際佛國より追譎せられたる經濟學者ドボン、ネモア、亞米利加に

航する船中よりジョン、バプチスト、セーに一書を贈り、彼れが經濟學の定義を餘り狹縮なる範圍に短縮せるを非難せり。其言に曰く。「正義の學問は凡ての社會的關係に適
用せらるべきものなるに、足下は交換的價值を有するものは凡て富なりと主張せり。リー、並にピレニ一の如き富者は其愛嬖の爲に年々多額の金錢を支出す。足下の議論に従へば彼等寵者愛嬖は富の生産者ならざるべからず。然れども國民品性の財源たるべき善良の婦人は此等寵嬖と全く相反するにあらずや」と。

或る著述家は不道德の書を著述して能く百版を重ね、二

千ポンドの利益を得ることあるべし。是等不道德の著書を購讀せざる前より精神的に遙か彼等の價值を失へり。如斯場合に於て其著書の販賣が出版者、著述者に尠なからざる利益を持ち來せしに拘らず、是等不道德の著書は果して富の一形態と稱し得べき乎。

英國は年々支那に一千二百萬弗の阿片を輸入す。是を以て果して眞正の富と稱し得べきか。其富にあらざること明なり。事實として支那帝が此等の阿片を海中に投入せしならば、支那は之によりて損害を生せざるのみならず、魔睡したる人間、勞役に堪えざる人民を減少するにより

て大に其國富を増加するからむ。其物の損滅が却て國を富ます如き貨物は果して眞正の富と命名し得べき乎。倖にして商買は有用貨物に支拂ふべき代價を阿片の爲に消費して顧みざる如き痴愚の人民を發見すれば、阿片は確かに商人にとりて大なる價值を有すべし。然れども阿片は人をして單に昏迷懦弱ならしむるに過ぎざるを以て、國民若しくは人種にとりて何等の價值を有することなし。阿片の如き極端ならざる酒、煙草に於ても亦異なることなし。是等は勞働によりて生産せられ、交換價格を有するを以て、經濟學者の言に従へば確かに富の一部たるに相

違なし。然れども此等を壊滅するは人間に取りて利益あるも害あることなきにあらずや。予が眞正の富と虚欺の富の間に區別をなさんとするは之が爲なり。此等の區別は道德衛生に依りて容易に決定し得べし。道德が如何に經濟上に影響するやは經濟問題を論ずるに當り常に感觸せらるゝ處たり。經濟上信用の基礎は^{コンフィデンス}信任にありて、信任は公正と善法の確保に原因す。信任の缺亡せる所には所謂商業上の信用成立することなく、假令僅かに成立するも利子の割合法外に高價のものならざるべからず。若夫れ出納掛が金庫の在中物を消耗し、會計

官吏が其計算を曖昧にし、會社の理事が決算報告書を偽造し、企業發起者が公衆を欺瞞して私利を營む爲に會社を組織する如きことあらば、産業の前途亦豫想すべきにあらずや。吾人は約束手形の森林に於て繁榮する商工業を希望せず。彼の東洋諸國の金利英國の如く低廉ならざる所以のもの又實に茲にありて存す。商業界に於て信用なき國は常に此原因の爲に困弊しつゝあり。露西亞、土耳古の如き實に此好適例なりと云ふべし。道德上の力は又労働の生産力に影響すること大なり。誠意労働に従事し、義務の觀念より勞役する職工は他に比

して其結果を擧ぐる事大なり。若し職工にして可成其勞を盗みて出來得る丈多額の賃金を食らんとする如き利己心に支配せらるゝに至らば其生産高は前者の過半にも達せざるべし。又商業上の信用は貨物の讓渡賣買に關係すること重要なり。其得意先を欺瞞する如き商人は忽ちにして自家の販路を閉塞するに至るべく、從て其國商業上の信用を失墜せしむるに至らん。又地主にして苛酷に其小作人を使役するなく、困難の際彼等を救助する如きに至らしめば、地主と小作人との間に圓滿なる關係を成立し、將來の危險たるべき階級間の敵意を調和せしむる

を得べし。

經濟學上最も重要な社會問題は又道德の範圍に屬する思考を以て解釋せられざるべからず。人民の大部分に有用なる食物を供給するは豫見、謹慎並に克己の美德に依るものにして此等の美德は皆道德の訓戒する所なり。資本の創設は善良なる行爲にして、中庸を得たる事情の下に始めて社會に行はるゝものなり。資本は將來の事業の爲に現在の娛樂を犠牲に供するものにして、多く道德の觀念に基づく。又生産の正反對なる消費の高は道德心の多少によりて決定せらる。貧民が困厄悲痛の境遇より

脱却するに充分なる資本を酒色の爲に浪費し、富者が奢侈放逸の生活を爲すに至るもの皆道德的傾向之を然らしむればなり。

古人並にモンテスキユの如きは、富の増加を以て國民零落腐敗と原因となし、務めて之を避けんとせり。古來國家の轉覆滅亡せるもの概ね皆之に依る。國民が太古簡樸質實の状態を脱して俄に富裕の境域に達せるの秋に際し、此富を利用するに必用なる道德心を缺乏せば、忽ちにして流離顛沛、零敗の極に達すること明かり。吾人は亞米利加合衆國の將來を思ふ毎に慨然として長大息せざるを

得ず。然れども共和政治の敗亡するは生産過剰によるよりは、分配の不平等に原因すること多し。兎に角此等の問題は小冊子の能く論悉する處にあらざるを以て、予は茲に之を詳論せざるべし。

第三章 經濟學と法律の關係

法律を研究することなくして經濟學の根本問題を理解し能はざる如く、經濟學の智識なくして法律の根原を闡明すること難し矣。卓越せる法律家は又經濟學者にして、拔群の經濟學者は兼て又法律家なり。然るに經濟學と法